
魔法少女リリカルなのはStS ~ 仮面ライダーWvsシンケンジャー 世界分け目の大決戦 ~

TAKUMA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStS 〜仮面ライダーWvsシンケンジャー 世界分け目の大決戦〜

【Nコード】

N1288M

【作者名】

TAKUMA

【あらすじ】

平穏な世界に今異変が起ころうとしていた。

悪意が蠢く事態に突如として現れる正義の戦士達。

予言にも無かった彼らの登場により、魔法世界が……いや、全世界が震撼する！

不屈の心を胸に抱き空を駆ける魔法少女

『高町なのは』

人の世を外道から護る為に闘う宿命の侍

『志葉丈瑠』

風都を愛しハードボイルドを目指す探偵

『左翔太郎』

『魔法少女』『侍』『探偵』3人の物語が交差する時、新たな物語
が今 始まる！

第1話 Sは突然に／魔法少女の始まり（前書き）

はじめまして。

こちらの方で投稿させてもらうのは初めてなのでお手柔らかに^^；
以前に自分のサイト等で書いてたのですが、
余裕を見つつ少しずつ書いていきたいです。

何分、初めてなので見苦しかったりしたら知らせて頂けると嬉しい
です。

では、お楽しみください^^

第1話 Sは突然に／魔法少女の始まり

世界は無数に存在している。

世界は物語の数だけ存在している。

しかし、無数の世界は互いの世界の存在を知らない。

知らないが故に、無数の物語は決して交差する事は無いだろう。

語

もし、互いの物語が交差した時、それは新たな世界
の始まりではないだろうか？ 物

『不屈の心を持った魔法少女の物語』

『ハードボイルド探偵を目指す青年の物語』

『人の世を外道から護る侍達の物語』

決して交わる事のない3つの物語が交差した時、どのよう
な物語が始まるのだろうか？

その答えは誰にも分からない……

ならば、その答えを見に行こうではないか……3つの物語
が交差する物語へと……

魔法少女リリカルなのはStrikers 仮面ライダーW
Sシンケンジャー 世界分け目の大決戦

第1話 Sは突然に／魔法少女の始まり

- 時空管理局遺失物対策部隊機動六課隊舎 ロビー

時空管理局とは、無数に存在する『次元世界』を文字通り『管理』している組織である。

『次元世界』には大きく分けて『管理世界』と『管理外世界』の2つがある。

どういう定義で『管理世界』なんて認定するのかは不明だが、認定された世界には時空管理局の支部を設置して治安維持に勤しんでいる。

そんなに世界の数が多いと、古代に創られた危険な代物等が出てくる訳で、それらを一纏めに『ロストログア』と命名し、管理局は回収し保管を行っている。

更にこれだけの世界があるという事は、中には次元世界を越えて犯罪を犯す者達も現れ、次元犯罪者の逮捕も管理局の仕事だ。

以上の3つが主な管理局の仕事であり、そして、彼女ら機動六課の面々も、その中の1つであるロストログアの回収任務から無事に帰還した所であった。

「ほな皆、今日はおつかれさん」

一同の前に立ち、労いの言葉を掛ける関西弁の少女は、この機動六課の部隊長である『八神はやて』

その横には彼女のユニゾンデバイスである『リインフォースツヴアイ』がふよふよ浮いている。

「目的の物はレリックじゃなかったけど、良い気分転換になったやろ」

「はやてちゃん……」

「はやて……」

あつはつはと気楽に笑うはやてを尻目に、彼女の親友である『高町なのは』『フェイト・T・ハラオウン』は呆れ口調で彼女の名前を呟いていた。

その後ろではボロボロの新人達が苦笑いで3人のやり取りを見ていた。

ちなみに、高町なのはは機動六課スターズ分隊の隊長、フェイト・T・ハラオウンは機動六課ライティング分隊の隊長として、3人共に同じ部隊の所属である。

部隊長であるはやてを筆頭に、なのは、フェイトの3人は管理局の誇るエース達であり、その実力は誰もが認めており、その3人に加えて

「なあゝはやてゝ早く飯にしようよ」

自らの腹部に手を当てて空腹を訴える赤毛の少女
機動六課
スターズ分隊副隊長ヴィータ。

「ヴィータ、いつまでも子供じゃないんだ。少しは我慢しろ」

そのヴィータの横で姿勢を正して立っているピンク色の髪の女性
機動六課ライトニング分隊副隊長シグナム。

「仕方ないわよ、シグナム。今日は朝からロストログアの騒ぎで食事どころじゃなかったし」

その2人のやり取りを後ろの方で見ていた金髪ミドルヘアーの女性
機動六課医務室長シャマル。

「……………」

そして、シャマルの横に物静かに鎮座している青毛の大型犬
機動六課……ペット？ザフィーラ。

この4人は八神はやてを護る守護騎士ヴォルケンリッターであり、その実力は先程の3人娘に劣らないと言われる。

更にヴォルケンリッター達の横に整列してる4人の少年少女達も苦笑いしつつも口を開いた。

「そうですよ、シグナム副隊長。もうお腹ぺこぺこで動けないですよ」

涙目ながらに、まるでしょ気込んだ犬を思わせる口調で訴える青髪ショートヘアーの少女
機動六課スターズ分隊員スバル・ナ

カジマ。

「ほら、しっかりしなさい！ みつとも無いわよ」

へこたれるスバルの腕を掴んで姿勢を正そうとしているオレンジ
髪のツインテールの少女 機動六課スターズ分隊員ティアナ・
ランスター。

「あはは……スバルさんの言う事も分かりますよ……」

「今日は朝から大忙しだったものね〜フリード」

「くきゅる〜」

苦笑しながらスバル達の言い分を理解している赤髪の少年
機動六課ライトニング分隊員エリオ・モンティアル。

機動

その隣で今日の出来事を思い返すピンク色の髪の少女

六課ライトニング分隊員キャロ・ル・ルシエ。

キャロの言葉に相槌を入れるかの様に返事した小さい白い竜
フレードリヒはキャロの使役竜である。

この4人は新人ながらも将来有望の原石であり、実力も日々上昇
している。

以上が、機動六課のメイン戦力である前線メンバーの面々である。

「じゃあ、交代部隊との引き継ぎ済ませて、ちょっと遅いお昼にし
よか？」

はやてが時計を確認すると、既にお昼と呼べる時間を越えて3時
過ぎを指していた。

夕食の時間まで微妙に時間があるし、今朝から碌に食べて無かつ

たので、一同ははやての言葉に賛同の声を上げた……その時だった。

ヴィー！ヴィー！ヴィー！

『 ツ！？ 』

突然に隊舎内に鳴り響く警報と共に、一同の前に赤いスクリーンが数枚現れ『ALERT』の意味を持つミッド文字が表示されていた。

その警報と警告を見た一同の顔に緊張が走る。

『八神部隊長！』

警報が鳴り響く中、はやての目の前に新たなスクリーンが現れる。映し出されているのは、ロングヘアーの部隊服を纏った女性機動六課ロングアーチ所属のシャリーこと、シャリオ・フィニーノであった。

彼女の様子からすると、何やら自分達にとって大変な事が起きたに違いないと腹を括ったはやてがシャリーに聞き返す。

「何があつたん？」

『今から1分前にクラナガン郊外にて多数のガジェットの反応を検知。』

確認された限りでは約50体前後の中隊が同時に数ヶ所に出現しました』

「なんやって！？ で、地上本部の対応は？」

『現在、ガジェットの動きは市街地へと進行中。』

陸上警備隊108部隊を始めとした部隊が小隊を編成して出撃している所です。

その際に機動六課にも協力の要請が先程ゲンヤ・ナカジマ三佐からありました』

シャーリーの報告を聞いた一同には非常にマズイ事態だと分かっていた。

そもそもガジェット 正式名ガジェットドローンには、魔法効果を無効にするフィールドAMF Anti Magilink Field が搭載されている。

その為に、魔法での攻撃は効果が薄く、一般魔導師が倒すには時間と人数が必要。

故に、陸士部隊総動員しても鎮圧するのに時間が掛かり過ぎると判断したゲンヤ・ナカジマ三佐は、ガジェット関連の専門部隊である機動六課に救援要請をした訳であった。

『三佐の要請では六課には陸士部隊の到着が困難な2ヶ所を叩いてその後は他の足止めをしている所への応援に向かってほしいと事です』

シャーリーの説明と共にクラナガン周辺のMAPと現在のガジェットの位置も表示された。

確かに2ヶ所だけ遠すぎて間に合わない中隊が存在しているのが見て分かる。

ゲンヤの言うとおり先に片づけて外周から片づけた方が確かに効率は良さそうだと確信したはやてはシャーリーに指示を出す。

「了解やとナカジマ三佐には返答しといて、随時陸士部隊の情報も回しといて。

それと隊長陣の航空許可申請もよろしく頼むわ。 ヴァイス君聞

こえる？」

『了解』と答えるシャーリーのスクリーンと入れ替わりに黒髪の男性　機動六課ロングアーチ所属でヘリパイロットのヴァイス・グランセニツクの姿が映し出された。

その背後では物々しく整備員達が右から左からと忙しくしている姿が見える。

『分かってますって、ヘリの発進準備はとくに済ませてます。いつでも飛ばせますぜ！』

「流石やな、今からFW陣を向かわせるから搭乗次第発進、その後は陸士部隊の情報を基にロングアーチからの指示通りに皆を運んでな」

『了解！』

「　　と言う訳で、皆……すまんけど、もう一働きして貰えるかな？」

指示を出し終わると踵を返して、事の成り行きを後ろで聞いてた面々の方を振り向く。

そこには今しがた任務から帰ってきたばかりなのに疲れた顔一つしてない隊長陣とFW陣の姿があった。

寧ろ、ヤル気満々で指示を待っているという感じだ。
全員を代表するかの様になのはが口を開いた。

「はやてちゃん……私達の答えは決まってるよ」

「そか……そやな、この程度でへこたれる皆じゃないもんな……」

ッ！ 総員クラナガン郊外に出現したガジェットを迎撃や
機動六課出撃！！」

『了解！！』

本当なら休ませてあげたいという気持ちを振り切り出撃宣言する
はやてに対してヤル気満々で返答する一同は、そのまま来た道を戻
ってヘリポートへと走り出して行く。

残ったのは指揮官である部隊長のはやてと補佐のリイン、後衛の
シヤマルとザフィーラのみとなった。

「さて、これから忙しくなるで〜」

少しでも前線の負担を少なくする為の指示を出そうと意気込んで
指令室へと急ぐはやてであった。

・クラナガン上空 JF-704式内部

ヘリポートへと到着した隊長陣とFW陣がヘリに搭乗すると同時
に機動六課隊舎を後にした。

現地への時間は早くても5分と少し掛かる距離なので、移動中に

現状を整理し作戦が練られていた。

『現在ガジェットが出現して約6分が経過しとる。
ガジェット達は付近の建物を破壊しつつ都心へと進行中や。
今の所、被害地区は郊外の為に人的被害は無いけど……このまま
やと……』

指令室から再度現状を報告するはやての言葉を聞きながら一同は
スクリーンに目を向けていた。

スクリーンにはクラナガンの地図と現在のガジェットの位置を印
した赤いマーカーと陸士部隊を印した青いマーカーが表示されてい
る。

数ヶ所に赤いマーカーと青マーカーがぶつかってるのが見えるが、
二ヶ所だけ赤いマーカーだけの場所があった。

大体の現状を把握した所で、なのはが口を開いた。

「今回の作戦を説明するね」

なのはの説明と共に新たなスクリーンが開いた。

そこには先程簡単に説明があった陸士部隊では当たりきれないガ
ジェット中隊の箇所を拡大したものだった。

ガジェットを示す筈の赤いマーカーが、およそ50個ずつ地図上
を市街地の方面へと移動している。

「まず私達はこの二部隊の相手します。

私達が現地に到着した時には既に市街地の目と鼻の先なので到着
次第結界を張り迅速にガジェットを破壊します。

その際の組み分けは、ポイントAをスターズ分隊が、ポイントB
をライトニングが担当します」

なのはの説明と同時に、表示されてたガジェットのマーカーが大きく2つに丸されて『A』『B』と映し出される。

「相手の数が数なので、倒し切るまでかなり時間が掛かるけど、全てを倒し終えたら私とフェイト隊長、シグナム副隊長とヴィータ副隊長はそのまま空から他の部隊の支援に向かいます。」

そして、残ったFW陣は合流次第、ヘリで近い所から順に支援に向かつて貰うね。その時の現場指揮は……ティアナに全て任せるね」

「は、はい！ 任せて下さい！」

突然の振りと現場指揮という重大任務に緊張しつつも、しっかりと応えるティアナ。

その彼女の様子を見て、なのはは頷くと説明を続け始めた。

「皆は出張任務から戻ったばかりで疲れが溜まってるから、本当なら休ませてあげたい。」

けど、この任務は私達以外に出来ない事……だから、無理はしないでお互いを支えあって乗り越えよう！」

「なのはさん……」

真剣な眼のなのはの言葉にティアナは数日前の出来事を思い出した。

自分の劣等感からの焦りと周囲のプレッシャー……色々な物が溜まりに溜まって先日の模擬戦で爆発したのだ。

ぶつかり合い、すれ違っていく2人だったが、その際に受け取ったなのはの『想い』を知り、ティアナは大きく進歩した。

「ティア、頑張ろう！」

「そうですよ、ティアさん」

「私も精一杯頑張ります！」

「クキユル」

馴れ馴れしく肩を抱いてくるスバルに、無邪気な笑みを浮かべる
エリオとキヤロ、ついでにチビ竜ことフリード。

自分には心強い仲間達がいる　だから、どんな苦難も打ち破
れる！

「当然よ！　さっさと片づけて食べ損ねたご飯を食べましょう！」

「うん！」

「「はい！」」

一致団結するFW陣を隊長陣は微笑ましく見守っていた。

若干一名……シグナムだけはいつも通りだったが……

そんなを和んだ空気の中、操縦席の方からヴァイスの声が聞こえ
た。

「なのは隊長、そろそろ現場上空です」

「了解。私達が降りた後は離れた場所で待機しつつ、FW陣の回
収運送よろしくね」

「了解ッス」

ヴァイスの返事と共にヘリのハッチが開いていく。

閉め切ったヘリ内部に風が流れ込むのを気にせずになのが高らかに宣言する。

「それじゃ、みんな行くよ!」

『セットアップ!!!』

一同がハッチから飛び降りると同時に『魔法使いへの変身の言葉を叫ぶ。』

その叫びに呼応するかの如く、それぞれのデバイスが機動し全員が空中でバリアジャケットを着用していく。

お互いに着地が違う為に離れていくライティング分隊を尻目に、スターズ分隊の面々は現場把握の為に上空からの様子を伺ったその時だった。

「え……?」

「こりゃ、何が起こったんだよ……」

最初に呟いたのは隊長であるなのは、続いてヴィータが驚きの表情で現場を見ていた。

新人2人も、スバルの魔法であるウィングロードを足場に現場を見下ろす。

「何よ……これ……」

「ガジェットが……全部壊れてる?」

呆けるティアナの横で呟いたスバルの言うとおり、現場には確かにガジェットは居た　　が、全て煙を上げて破壊し尽くされた後であった。

何処かの陸士部隊が管理局員がやったのだろうか？と疑問が思い浮かんでしまう。

こんな短時間で50体ものガジェットを倒すとなると、高ランクの魔導師でも難しい話。

かくいうなのは達も該当する高ランクの魔導師だが、たったの5分程度で50体は難しい。

広範囲の殲滅魔法を使えば一応可能だが、地形を見る限り使った形跡は無かった。

「とりあえず降りてみようぜ」

ヴィータの言うとおり、この場に留まっても意味は無い。

他に残ってるガジェットが居ないか探索の為に一度地上に降りる事にする。

地面に降り立ちガジェットの残骸を見ると、破壊に特徴を見つけた。

なのはとヴィータが降り立った周辺のガジェットは見事にモノアイを撃ち抜いているのだ。

「凄い……どれもズレずに打ち抜いている……」

「ああ、こんなの出来るのはお前以外にいなーと思ったんだがな」

1つ1つ簡単に確認するが、1つもずれずに見事に撃ち抜いている。

こんな芸当が出来るのは相当訓練された射撃型魔導師だろうと2人が考えてた時、他の場所に降りたスバルの声が聞こえた。

「なのはさん！ ヴイータ副隊長！ こっちの方も見て下さい！」

少し離れた場所に降りた2人の方から自分達を呼ぶ声に足向け
る。

暫くするとスバルが手を振ってるのが見え、その横ではティアナ
がガジェットの残骸を調べていた。

なのは達の姿を確認したティアナが立ち上がる。

「お2人共、これを見て下さい」

ティアナの指すガジェットの残骸に目を向ける2人は驚愕した。
先程の残骸とは違い、こっちの方は全て鋭利な刃物で斬られてる。

「凄い切れ筋……こんな綺麗に斬れてるの始めてみました」

残骸を手にとって関心するティアナの言葉に2人も同意する。

接近戦を得意とするフェイトや、文字通り剣で戦うシグナムでも
同等の芸当は無理な話だった。

フェイトの得物は魔力で構成された刃なのだが、ここまで鋭利に
斬るとなると相当の魔力コントロールで鋭くしなければならぬ。

魔法が効き難いAMFを持っているガジェット相手だと、魔力コ
ントロールどころでは無くなるのだ。

一方のシグナムは西洋剣をモチーフにしたデバイスで斬るのだが、
西洋剣は『斬る』よりも『突く』に優れている。

西洋剣で斬ったとしても『斬る』というより、どちらかと言えば
『押しつぶす』と言った方が正しいのだ。

しかも、断面を見れば『切る』という生半可な物でなく、文字通
り『斬る』と言った表現が正しい。

「……とりあえず、此処で考え込んでも仕方ないよ。
この事は報告して、フェイトちゃん達に合流しよう」

そう言ってロングアーチへと連絡するなのは。

他の3人はなのはの言うとおり、今は他の場所を片付けるとい
事に気持ちを切り替えつつ心の何処かで想っていた

これをやった人物は『敵』なのか？『味方』なのか？

それを教えてくれる物は何も無かった。

第1話 Sは突然に/魔法少女の始まり(後書き)

一話にしては、少しボリュームが無かったですね^^;
殆ど話は進んでません。

この先の予定ですが、大体ご想像通りだと思いますw
それでは、また次回

第2話 Sは突然に／探偵の始まり（前書き）

やっと2話の完成です

本当なら、もう少し長くなるんですが、更に更新が遅くなりそうだったので、ここで切りました^^；

おそらく3話はもっと短いと思うので早めに出来るかな……

文才が無いので、思った以上に難航してます、読みにくかったら御免なさい><

それではどうぞ^^

P S ・感想のユーザーのみを解除して誰でも書けるようにしました。

【更新】 2011・3・6 一部改正

第2話 Sは突然に／探偵の始まり

無限に存在する世界。

その中の1つでまた新たな物語へと導かれる出来事が起こりつつあった。

世界の舞台は1つの街『風都』

風都には平穏に暮らす人々の姿があるが……その裏では人々の想いが嘆き苦しんでいた。

その苦しみを増幅させている悪魔の道具『ガイアメモリ』
から風都と人々を護る1人……いや、2人の青年の物語である。

第2話 Sは突然に／探偵の始まり

- 風都 某所

この物語の舞台である街 『風都』

文字通り風都では常に風が吹いていて街の至る所にシンボルである風車が立っており、通称『エコの街』

一見平和な街に見えるが、その裏では大きな陰謀を抱えた者達により悪魔の道具『ガイアメモリ』がばら撒かれ、街の人々を苦しめている。

そんな人々や街を泣かせる奴は許さないと硬く誓った青年

左翔太郎は今日もガイアメモリを使った怪人『ドーパント』との戦っていた。

「行くぜ、フィリップ！ 変身だ！」

黒いソフト帽を被った青年 『左翔太郎』が懐から取りだし

た赤いバツクル 『ダブルドライバー』を腰に当てるとドライバーからベルトが飛び出し翔太郎の腰に装着された。

同時に翔太郎の後ろに居たクリップで髪を止めている『フィリップ』と呼ばれた青年の腰にも同じベルトが浮き出す様に姿を現す。

その翔太郎の言葉にフィリップは翔太郎の横に歩み寄ると懐から少し大きめの緑色をしたUSBメモリの様な物を取り出し、スイッチを押した。

? CYCLONE ?

このUSBメモリの様な物こそが『ガイアメモリ』であり、そのメモリから『ガイアウィスパー』が響き渡る。

同じ様に翔太郎も黒色のガイアメモリを取り出し、スイッチ押す。

? JOKER ?

その2つのガイアウィスパーを聞いた目の前にいる怪人 ド

ーパントがうるたえ始めた。

翔太郎は右手、フィリップは左手にガイアメモリを持つと、2人の腕の形が『W』を描く様に構える。

「「変身！」」

2人が同時に『戦士への変身の言葉』を叫ぶと同時に、フィリップがダブルドライバーの右側のスロットに緑色のガイアメモリを差し込む。

すると、差し込んだ筈のガイアメモリが消え、翔太郎の方の右側のスロットに現れた。

同時にフィリップは目を瞑り意識を失ったかの様に倒れこむ所を後ろから駆け付けた少女に支えられる。

「よいしょ！ ナイスキャッチ、私！」

少女 『鳴海亜樹子』はフィリップの身体を支えるとそのままズリズリと引きずって後退していく。

内心で「また靴底が擦り減るな」というツツコミを入れつつ翔太郎は現れた緑色のガイアメモリを差し込む。

今度は自分の黒色のガイアメモリを反対の左側のスロットへと差し込み、ダブルドライバーを左右へと開いた。

? CYCLONE JOKER?

再び鳴り響くガイアウィスパーと翔太郎を中心に巻き上がる竜巻。風と共に巻き起こる緑と黒の粒子が翔太郎へと張りつき姿を変えていく。

一瞬にして竜巻が収まると、そこには右側が緑色、左側が黒色をしたボディをした人物が立っていた。

顔に大きな紅い複眼、そして額にはV字型アンテナ、腰には開いた事によりW字に見えるダブルドライバー、首には風になびくマフラー……

「貴様……まさか噂の仮面ライダー！？」

その姿にうろたえながらドーパントが問い掛ける。

『仮面ライダー』 風都に現れる怪人から人々の平和を護る姿を見た風都の人達が与えた名称であった。

「そう、俺は……いや、俺達は2人で1人の仮面ライダーWだ！」

律儀にポーズを決めてドーパントの問いに応えるW。

何故に言い直してまで『俺達』と言ったか？

『2人で1人の』という意味は何故なのか？

その意味は次のWの言葉で分かった。

「『さあ……お前の罪を数えろ！』」

左手でビシッとドーパントを指すWからは、変身した翔太郎だけでなく意識を失ったフィリップの声までも聞こえた。

フィリップは意識を失ったわけではなく、ダブルドライバーを介して、翔太郎の身体へと入り込んでいるのだ。

その為にWは強力なガイアメモリの力を十二分に発揮する事が出来る。

「く、くそーっ！」

自棄になったドーパントの口から緑色の液体をWに向けて吐き出した。

襲いかかる液体に悪寒を感じたWは即座に右方向に前転する形で避ける。

液体はそのままWの立つた場所のアスファルトに掛かると紫色に変色しながらアスファルトを溶かしていた。

「あつぶねー」

片膝を付いた状態で白煙を上げながら溶けてるアスファルトを見て冷や汗を流すW。

するとWの右目が紅く点滅しながらフィリップの声がする。

『奴のメモリは『POISON』、あらゆる毒物を体内で生成して作り出す事が出来る。』

今のは溶解効果を持つ毒液の様だね。いくらWでも当たると溶かされてしまう。

接近して闘うのは危険だ、此处はルナトリガーにメモリチェンジするべきだ』

「へっ、その必要はねえ。あの程度の液体ならサイクロンのスピードでも避けられるぜ」

『ちよっ、翔太郎！？』

フィリップの説明とアドバイスを無視した翔太郎 Wはポイズンドーパントに向かって走り出す。

アドバイスにあった『ルナトリガー』とはWの数多い戦闘形態の1つで、変幻自在な弾丸を利用した射撃戦を得意としている。

対して、現在のWは『サイクロンジョーカー』、素早いスピードでの肉弾戦を得意とする戦闘形態だ。

他にも数多い戦闘形態を使いこなすのがWの大きな力となってい

る。

「舐めやがって！ 喰らえっ！！」

2人の会話を聞いていたポイズンドーパントも逆上して次々と毒液を吐き出すが翔太郎の言う通りスピードは然程速くない。

この程度の速さならサイクロンで十分に避けられると言う翔太郎の考えも正しく感じられた。

迫り来る毒液を次々とかわしていくWの動きに段々と着いて行けなくなつたポイズンドーパントの動きが一瞬止まる。

「今だ！」

その隙を逃さずにポイズンドーパントの死角である後ろに回り込むと強烈な左ストレートを繰り出す　　が、

プシュウウウウツ！

「何ッ！？　　ッ！？」

突然ポイズンドーパントの背中に小さな穴が開き緑色のガスがW目掛けて噴き出した。

既に攻撃モーションに入ってたWが避けられる筈も無くガスの餌食となる。

「ぐあああああつ！！」

噴射されたガスを思いつきり吸いこんでしまったWがその場に苦しみながら地面に膝を着いた。

喉に手を当ててもがき苦しむ姿にポイズンドーパントが笑い声を挙

げる。

「ギャハハハハ！ 馬鹿な奴め、俺が作り出せるのは『毒液』だけじゃ無いんだよ！」

『不味い、今はメモリのお陰で抑えられてるが、このままだと翔太郎の身体が持たない！

かと言って変身を解けば毒の進行が一気に加速してしまう！』

ソウルサイドのフィリップには特に影響は無いのか、冷静に状態を見定めている。

一方のボディサイドの翔太郎の苦しみ様が更に増して呻き声も拳げられない程の体力を消耗していた。

「苦しまずにすぐに楽にしてやる。 身体ごと溶かしてな！」

口内で最大級の溶解液を含むと目の前で倒れているW目掛けて吐き出す。

もう駄目だとフィリップが覚悟した時だった

? TRIAL?

ヴォオオオオン！！

「何！？」

何処から聞こえたガイアヴォイスと共に青い旋風がポイズンドーパントの前を駆け抜ける。

駆け抜けた跡に残ったのは溶けるアスファルトのみ、Wの姿が消えていた。

青い旋風はそのまま離れた場所で止まり、その正体を現す。

「大丈夫か？ 左、フィリップ」

『ああ、助かったよ、照井竜』

姿を現したのは青いボディにモトクロスヘルメットの様な顔にオレンジ色の複眼、背中には車輪の様な物が着いていて、バイクのハンドルをモチーフにしたバックルのベルトをしている仮面ライダー

『仮面ライダーアクセルトリアル』であった。

フィリップが礼を言った『照井竜』という名前は、アクセルの装着者の名前である。

『奴の毒には気をつけてくれ。 翔太郎も奴の毒にやられてしまった』

「ふん……そんなもの、全て振り切ってやるぜ！」

ヴオオオンとエンジン音がしたと思ったら、アクセルの姿は無く青い旋風がポイズンドーパントへと襲いかかる。

仮面ライダーアクセルトリアルの最大の特徴は目に止まらない程の速さ。

パワーが低い分、その速さで一度に何十発をも攻撃するという戦闘スタイルが彼の闘い方である。

「この！ この！」

ポイズンドーパントも毒液や毒ガス等を噴き出して攻撃を仕掛けるが、既に攻撃した場所にアクセルの姿は無く反対方向から攻撃を受けていた。

一方のWの方は相変わらず苦しんでいる翔太郎に打開策が無いか
フィリップが考えてた時、1つの妙案を思いつく。

『この毒がメモリの力なら、それ以上の力で押し返せるかもしれない！』

フィリップの呼び掛けに応えるかの様に鳥の様に聞こえる鳴き声を響かせながら『何か』が何処からともなく飛んで来た。

その鳥型の機械 『エクストリームメモリ』は離れていた亜樹子の傍に寝ているフィリップ本体の身体目掛けて緑色の光を放つ。緑色の光によってフィリップの身体はまるで吸いこまれるかの様にエクストリームメモリの中へと入ると、そのままWの方へ飛んで行く。

『翔太郎！ エクストリームを使うよ！』

「あ、ああ……」

フィリップに何か策があると感じた翔太郎は残り少ない体力を振り絞って立ち上がる。

ヨロヨロと立ち上がるWのダブルドライバーのスロットが閉じ、上に向かって2本の光が立ち上がった。

まるで誘導灯を思わすかの様な光のレールにエクストリームメモリが乗っかり、そのまま垂直に降下するとダブルドライバーと合体を果たす。

そして、再びダブルドライバーを展開した時、眩い光が周囲を包み込んでいく。

? EXTREME ?

ガイアウイスパーと共にWの身体の中央が開いていき、左の黒、右の緑色に加えて中央にクリスタル色が加わる。

紅い複眼はそのままだが、触覚や手足のリングはX字型に代わり、シオルダーアーマーはWの形に変わっていた。

これがWが『地球の本棚』に直結した姿 『仮面ライダーW サイクロンジョーカーエクストリーム』である。

エクストリームに変身した際に翔太郎の身体から緑色のガスが抜けるのが見える様に分かった。

『これは一体……』

左型の複眼が点滅し翔太郎が疑問の声を挙げた。
その喋りの何処にも苦しみの微塵も残ってない。

『奴のメモリの力をエクストリームで相殺したまでさ』

今度は右側の複眼が点滅してフィリップが疑問に答える。

その説明に以前に『YESTERDAY』のメモリの力を相殺した時を思いだし、翔太郎は納得した。

『よし！ 借りは倍にして返してやるぜ！ 照井！』

圧倒的なスピードでポイズンドーパントを翻弄しトドメを刺そうとしていたアクセルに向かって翔太郎が叫ぶ。

アクセルも「仕方がないな」と言いながらアクセルドライバーからトリアルメモリを引き抜きマキシマムモードに変形させた。

ストップウォッチを想わせるトリアルメモリのスイッチを押すとカウンターが作動し秒数を刻み始める。

上空に向けてトリアルメモリを放り投げると、今までとは比べ物にならないスピードでポイズンドーパントの懷に飛び込み次々と

キックを入れていく。

「はあああああああつ!!」

ドガガガガガガガガ!

まるでマシンガンの銃撃の様な連続蹴りに成す術も無いポイズンドーパント。

Ｔ字型に蹴り続けるアクセルの攻撃に身動き取れずそのまま少しずつ身体が浮き上がっていく。

「行くぞ! 左!!」

トドメと言わんばかりに浮きあがったポイズンドーパントをWの居る方へと蹴りあげる。

蹴りあげられたポイズンドーパントを見たWがベルトのバックルに手を掛けた。

『よし、行くぜ! フィリップ!!』

『ああ、翔太郎!!』

バックルと一体になっているエクストリームメモリを一度閉じると再度開いた。

? EXTREME MAXIMUM DRIVE?

響き渡るガイアウイスパーと共にエクストリームメモリから黒色と緑色の竜巻が放たれる。

竜巻はWを飲み込み上空へと舞い上がり、飛ばされたポイズンド

ーパントよりの上を超えた。

『ダブルエクストリーム!!』』

ドオオオオオオオオオン!!

上空で旋回した竜巻の中からWの放つドロップキックがポイズン
ドーパントへと炸裂し、大爆発を起こした。

丁度のタイミングでアクセルの手元へと落ちてきたトライアルメ
モリをキャッチして再度同じスイッチを押す。

? TRIAL MAXIMUM DRIVE?

トドメの意味を込めたガイアウイスパーが響く中、カウンターに
は『9・9』と表示されている。

「9・9秒、それがお前の絶望へのタイムだ……」

跡に残ったのは地面の上で気絶している女性と粉々に砕けたポイ
ズンメモリの残骸のみだった。

その傍には着地したWがエクストリームメモリを再度閉じて変身
解除する。

「まさか元カレとの思い出の場所を溶かしまくるとは……女の嫉妬
は恐ろしいな」

ソフト帽を被り直しながら呆れる翔太郎の横を変身解除した竜が
通り女性の手に手錠を掛けた。

「後は警察の仕事だな」といつもの台詞を呟くと、事務所に戻ろ
うと相棒のフィリップの方へと声を掛ける。

「フィリップ、帰るぞ　　って、どうした？」

振り向いた先に居た相棒は翔太郎の言葉にも目を呉れずに上の方をずっと見つめていた。

「いや……エクストリームメモリが……」

「エクストリームメモリ？」

フィリップの言葉の意味が分からないまま同じ方向を見ると、エクストリームメモリが鳴き声を上げながら上空を旋回している。その何処が変なのか分からない翔太郎は再度フィリップに問い掛けた。

「何もおかしいこと無いけどな？　元氣そつに飛んでるな」

「何々？　どうしたの？」

翔太郎とフィリップが2人して上を見てるので不思議に思った亜樹希子も近づいて上を見る。

それに釣られて竜も手錠を掛けながら目を向けた。

「いつもなら戦いの後に何処かに飛んで行くのに、今日はずっと残っている……どういう事だ？」

フィリップの疑問点に対し、他の3人の意見はそこまで疑問視にしていなかった。

「そうか？　今日は偶々そんな気分じゃないのか？」

「そうそう、フィリップ君の気にし過ぎだよ」

「じゃ、俺はコイツを署まで連行して来る」

三者三様の答えにフィリップも考え過ぎかと視線を落とした
その時だった。

エクストリームメモリの目がキラリと光ったと思ったら、フィリップの真上まで飛んできて先程と同様にフィリップの身体を体内に取り込んだ。

「なっ！ フィリップ！！」

突然の目の前の出来事に頭が着いてこなかった翔太郎は手を差し
伸べ様とするが既に姿は消えていた。

翔太郎の叫びに異変を気付いた亜樹子と竜が振り向くとフィリップの姿は無く、翔太郎の真上に浮遊するエクストリームメモリが目に入る。

「翔太郎君！ 上！！」

「え？ 上？」

亜樹子の叫びに反応した翔太郎が上を見上げた時、緑色の閃光が
翔太郎の視界を遮る。

思わず手で目を隠した次の瞬間 翔太郎の身体も粒子化して
エクストリームメモリへと取り込まれた。

「翔太郎君！ フィリップ君！」

「左！ フィリップ！」

目の前で消えた2人の名前を叫ぶ亜樹子と竜の嘲笑うかの様な鳴き声を上げると、エクストリームメモリは何処かへと飛んで行こうとする。

逃がすかと再度アクセルへと変身しようとした時、突如エクストリームメモリの目の前に光のオーロラが現れ、エクストリームメモリは迷いも無くオーロラの中へと入ると、その姿を消してしまった。わずか一瞬の出来事に竜は兎も角、亜樹子は混乱している。

「何？ 何が起こったの？ いきなりフィリップ君と翔太郎君が攫われたと思ったら、攫った犯人は消えちゃうし……私、こんなの聞いてない！！」

いつもの口癖を放つ亜樹子の横で、竜は冷静を保っていた。

「とりあえず、この女を連行してから事務所へ行く。

もしかしたら戻ってるかもしれんしな。戻って無ければ搜索する」

「う、うん……」

「心配するな、あの2人なら並大抵の事でくたばる様な奴らじゃない」

「うん……そうだね！ あの2人のしぐとさは並大抵じゃないもんね！ ありがと！」

亜樹子の肩に手を乗せて慰めの言葉を掛ける竜。

その言葉に元気を取り戻し、いつもの調子に戻った亜樹子は事務

所へと足を向けた。

「きつと2人なら大丈夫。何ってたって、あの2人は『仮面ライダー』なんだから！」

英雄の意味を持つ 『仮面ライダー』という言葉信じ、2人の無事を願う亜樹子。

もしもの時は同じ英雄 『仮面ライダー』として2人の分まで戦い抜いてみせる決意をする竜。
諦めずに消えた2人を信じて先に進む2人であった。

そんな2人の姿を見ていた人物がいた。

「そう……エクストリームはあの2人を『新たな運命』へと誘うのね……」

顔から手まで全身を包帯で隠し、サングラスに黒いコートと帽子を被った女性は意味深に言葉を呟く。

「だけど、来人は兎も角、左翔太郎に運命を乗り切る事が出来るかしら……この世界……いえ『全世界の滅亡』という運命を……」

次の瞬間、女性の身体は消えていた。
その時残ってた光のオーロラが暫く漂うとスッと消えていく。

連れ去られた2人の行方は

女性の残した言葉の意味とは

全ての鍵を握る新たな物語が今始まったのだった。

第2話 Sは突然に／探偵の始まり（後書き）

第2話どうだったでしょうか？

やっぱり、あまり話が進んでませんね^^；

劇中であつた『光のオーロラ』については今の所ノーコメントです、
ゴメンナサイ><

やっぱり、トリップ物だったら、最初は原因不明で訳分からずに飛ばされるというのが良いかなーと、こういう形になりました。

さて、次回は前書き通りに短くなる可能性がありますのでご了承ください><

感想お待ちしております！

第3話 Sは突然に／運命は動き出す（前書き）

遅れて申し訳ありません＞＜

やっと第3話が書きあがりました。

戦闘シーンは好きなのですが、やはり苦手です＞＜

文章も短くて読みづらいかもしれませんが、何卒よろしくお願いします。

【更新】 2011・3・6 一部改正

第3話 Sは突然に／運命は動き出す

人。

突如としてエクストリームメモリによって連れ去られた2

2人の行方は一体……

その不可解な行動を示す意味とは……

そして、謎の女性の残した『全世界滅亡の運命』とは……

運命に導かれた2人が新たな物語を紡ぎ出す

第3話 Sは突然に／運命は動き出す

-
????

緑が茂った森林の上空に光のオーロラが現れた。
その中から、先程フィリップと翔太郎をその身に取り込んだエク

ストリームメモリが飛び出す。

エクストリームメモリは辺りを旋回すると、市街地に近い場所へと降りて行く。

ちよつとした高さまで降下した後に、緑色の光を放ち、取り込んだ2人を外に出す。

「うわああああ!？」

突然投げ出されて思わず悲鳴を上げる翔太郎は受け身を取る暇も無く背中を打っている。

一方のフィリップも投げ出されるが、こっちは見事に着地していた……

「ぐはっ!!」

翔太郎の腹の上に。

「フィ……フィリップ……お、おも……い……」

「ああ、ごめん」

一瞬翔太郎の姿を探したフィリップが足下に翔太郎が呻いているのを見つけると直ぐに降りる。

流石に男1人の体重の負荷はキツく起き上がると腹部を擦る翔太郎。

「あー痛……しかし、此処は何処だ？」

擦りながら周囲を見渡すと、何処かの林だという事しか分からなかった。

風都にも同じ様な場所があるが、此処が風都なのかどうかも分からない。

懐から携帯電話型ツール『スタッグフォン』を取りだしアンテナを見ると一応アンテナは三本立っている。

圈内なのは助かったとアドレス帳から『鳴海亜樹子』のアドレスの番号を出すと早速掛けてみた。

『おかけになられた通信アドレスは現在使われておりません』

「はあ!？」

思わずあんぐりと口が開いたまま驚きの声を上げた翔太郎。再度、画面を確認するがアドレスは確かに鳴海亜樹子の物だった。試しに照井竜や事務所にも掛けてみるが同じ音声案内が返ってくる。

しかも、音声案内も『電話番号』ではなく『通信アドレス』と変な単語を使うのも気になった。

「フィリップ、そっちはどうだ？」

何故か手を広げたまま目を瞑り動かないフィリップに翔太郎が声を掛けた。

その声に反応して、目を開いたフィリップが答える。

「一応、『地球の本棚』には入れた。しかし、此処が何処なのかは検索範囲が広すぎて特定できない」

フィリップには『地球の本棚にアクセス出来る』という特殊能力が備わっている。

『地球の本棚』にはあらゆる知識や情報、技術等が印されており、

フィリップはそれらを閲覧する事で取得する事が出来るのだ。

ただし、それは膨大な量の為にフィリップ自身も全て閲覧した訳ではないので万能とは言えない。

閲覧する為には『検索項目』と『キーワード』が必要で、いつもは翔太郎が外で集めた情報からキーワードを割り出して検索している。

しかし、今回の様に特定のキーワードが無ければ、検索する事も出来ないし、検索したとしても該当数が多すぎて特定出来ないのだ。

「ヒントになりそうなのと言えば『繋がらない電話』……それに音声案内が言ってた『通信アドレス』という単語くらいだな」

「……………駄目だ。キーワードが曖昧すぎる。もう少し情報が必要だ」

再度、地球の本棚で検索したフィリップが溜息を吐きながら答える。

試しにと翔太郎がフィリップのスタッグフォンに掛けてみると繋がった事からスタッグフォンの故障とは思えない。

今度は１１０番や１１９番といった緊急通報用電話番号に掛けてみる。

緊急通報用電話番号なら繋がるだろうと高を括ってたが、これは先程同様に繋がらない。

試しに海外の緊急通報用電話番号を地球の本棚で調べて掛けてみるがどれも結果は同じ、流石に全世界の番号に掛ける訳にはいかなので途中で諦めた。

「はあ……とりあえず歩くか。適当に歩いてれば何か見つかるだろ」

スタッグフォンを懷に戻した翔太郎がズレかった帽子を直して歩き出す。

するとフィリップが徐に指を指した。

「ならば、あっちの方角に行ってみよう。少しだけだが建物が見える」

「お前、それを早く言えよ！」

相変わらず何かが抜けてるなと呆れつつもフィリップが指した先を見る。

確かに林の向こうに建物らしき物が見えていた。

正しく『灯台下暗し』とは、この事だろうと思いつつ歩き出す。

暫く歩くと突如フィリップが足を止めた。

同時に翔太郎も足を止める。

「……囲まれてるね」

「ああ……こそこそしてないで出てこいよ！」

身構えた翔太郎が叫ぶのに応じた謎の気配の主達が木の影から現れた。

「「な　　ッ!?!」」

現れた相手の姿を見て驚く2人の声が重なる。

普段から『怪人』の姿であるドーパントと戦ってる2人には相手の姿を見て驚く事はまず少ない。

だが、出てきたのは『怪人』ではなく『ロボット』　　のよう
な機械だった。

「なんじゃありゃ!？」

「宙に浮くカプセル型のロボット……実に興味深い」

木の影から現れた見た目機械で出来たそれは、楕円形型　カ
プセル型の物と巨大な球型の2種類あった。

カプセル型の方は黄色いセンサーみたいな物が中心に1つ付いて
おり、側面から数本のケーブルが触手の様に動いている。

もう一方の球型のロボットは黄色いセンサーみたいな物が3つ付
いている事と2本のベルト状のアームが付いている他はカプセル型
と特に変わった様子は無い。

数はカプセル型は約20体、球型は3体といったところだろうと
フィリップは目測で数を数えている。

「うへ……そんなにいるのかよ……しかも、同じ様にウニヨウニヨ
と動かしやがって、気持ち悪いな!」

翔太郎の言うとおり、流石に25体近くの触手が一齐に動いてい
る様子は気持ち良い物ではない。

しかし、フィリップの方はそんな些細な事を気にせずに興味深々
な反応を見せる。

「翔太郎、あれはどう見てもオーバーテクノロジーを使っていると
見て間違いないよ」

「オーバーテクノロジー?　　って事は、何処かの組織の新兵
器って事か!？」

かつて風都にはガイアメモリを開発・販売していた組織が存在し

ていた。

その組織の名は『ミュージアム』、組織は地球との一体化し、地球を我が物としようとしたが、その野望は翔太郎達 仮面ライダーにより阻まれ倒された。

しかし、『ミュージアム』が無くなってもガイアメモリの脅威が去った訳で無く、今現在も戦い続けているのだ。

翔太郎が言う組織というのは、そういう敵対組織の事を指している。

ちなみに今の様に刺客と思わしき者達に襲われた経験は少ない。

敵からすれば『仮面ライダー』という『英雄』は目障りなのだ。

「さあ？ 僕にも分からない。 だけど、1つ確かなのは……彼らが僕達と親交を深める気が無いという事だけだ」

「の様だな」

ロボット軍団がジリジリと自分達を囲もうとするのに対し身構える。

翔太郎が懷からダブルドライバーを出して装着し、ジョーカーメモリのスイッチを押そうとした時、翔太郎に異変が起きた。

「うっ！」

突如顔を顰めてよろける翔太郎にフィリップが呼び掛ける。

「翔太郎！？ そうか……さっきの毒で消耗した体力が戻りきっていないんだ」

その上にエクストリームを使用したのだから体力が戻ってないの

も仕方がなかった。

ならば、フィリップがボディサイドになる『ファングジョーカー』で行くしかないとならばファングメモリを呼ぶ声を上げる。

「ファング！……ファング！？やはり駄目か」

いつもならフィリップの呼び掛けに応じて現れるファングメモリだが来る気配は無かった。

ファングが使えないとなると、この場を乗り切るのは翔太郎をボディサイドにするしかない。

（だが、翔太郎の身体が持つかどうか分からない。他に方法はないのか？）

フィリップが他の方法を考える中、翔太郎が動いた。

「フィリップ、俺なら大丈夫だ。つべこべ考えてる暇はねえ！行くぞ！」

「……分かった。ただし、その身体じゃ持久戦は不利だ。少しキツいかもしれないが一気に行くよ」

翔太郎の決意に応えたフィリップが取りだしたのは緑色のサイクロンメモリではなく、黄色の『ルナメモリ』を取りだしスイッチを入れる。

？LUNA？

響くガイアウィスパーに反応し、ロボット達の動きが一瞬止まる。それを見た翔太郎は青色の『トリガーメモリ』を取りだした。

「ああ、分かったぜ」

翔太郎は少し前に出てメモリーのスイッチを入れる。

? TRIGGER?

「変身」

フィリップがダブルドライバーのライトスロットへとルナメモリを差し込むと、先程同様にその場に倒れる。

そして、翔太郎のダブルドライバーへと転移したルナメモリを指し込み、レフトスロットにトリガーメモリを指しダブルドライバーを開いた。

? LUNA TRIGGER?

黄色と青色の粒子が翔太郎の身体を包み込み『仮面ライダーWルナトリガー』へと姿を変えた。

外見はサイクロンジョーカーと同じだが、身体の色が右側が黄色、左側が青色になっている。

そして、左側の胸部にはトリガーの武器である『トリガーマグナム』が装備されている。

右手でトリガーマグナムを引き抜き左手でロボット達を指差してポーズを決めた。

「さあ、お前達の罪を数えろ」

流石にロボット達が答える筈も無く、代わりに黄色いセンサーが光りレーザの様な物を放ってきた。

即座に反応したWは横に転がり回避しながら冷や汗を掻く。

「ロボットにビームって……何処ぞのSFかよ」

『ますます興味深い。 翔太郎、サンプルとして捕獲しよう。
アレを調べれば、もしかしたら何か分かるかもしれない』

「やれやれ……また始まった と言いたいが、今回はかりは俺も同意見だ」

フィリップの検索癖に毎度悩まされる翔太郎だが、今回はそんな事を嘆いてる場合ではない。

未だに自分達が何処にいるか分からない所で現れた謎のロボット集団。

どう考えても偶然とは思えない上に、これがもしも組織の新兵器なら調査する必要がある。

そうと決まれば一気に決めようとダブルドライバーからトリガーメモリを引き抜く。

『なるべく損傷は軽減させたい。 あの黄色いセンサーを狙おう』

「OK、一発で決めるぜ」

トリガーマグナムのマキシマムスロットにトリガーメモリを差し込み、下がっていたマキシマムドライブ用の銃身を上げてマキシキムモードへと変形させた。

? TRIGGER MAXIMUM DRIVE ?

響き渡るガイアウイスパーと共にトリガーマグナムにエネルギー

がチャージされていく。

ゆっくりとトリガーマグナムをロボット達の方へと向け、両手でグリップを握る。

「『トリガーフルバースト！！』」

2人揃って必殺技を叫ぶと同時に引き金を引いた。

銃口から一斉に放たれた無数の黄色のエネルギー弾がロボット達へと襲いかかる。

木々によつて入り組んだ中でも『幻想の記憶』を宿したルナメモリにより、変幻自在に動くエネルギー弾の前では意味を成さない。そして、『銃撃手の記憶』を宿したトリガーメモリによって、正確に狙ったセンサーのみ打ち抜いていく。

次々と地面に転がるガラクタの数が増えていく中、最後の一体が静まりWが構えていたトリガーマグナムを下げる。

時間にしてわずか10秒足らずで全て片付いてしまった。

「ふう……ま、こんなもんか」

『とりあえず一体サンプルとして回収しよう。』

あとこの場から早めに離れた方がいい、奴らの増援が来るかもしれない』

「ああ、そうだ　　ッ！？」

近くの一体を回収しようとした翔太郎の手が止まり、再度トリガーマグナムを構えた。

茂みの方から気配を感じた翔太郎がトリガーマグナムを茂みへと向ける。

フィリップも意思を感じ取り、Wは茂みの方へと数発エネルギー

弾打ち込む。

放たれた弾は茂みの奥の気配に当たった……かは見えないので分からなかった。

自ら突っ込んで確認するかどうか迷ってた時だった

ガサッ！

突然茂みが動いたかとWが身構えると、茂みから人影が飛び出した。

それに反応して思わずトリガーマグナムの引き金を引いてしまうW。

襲いかかってくるエネルギー弾に当たると思った次の瞬間

ザンッ！

『え……』

「な……に……」

思わず何が起こった分からなかった。

ルナトリガーの弾速は決して遅くなく、今居る場所から謎の人物までの距離で言えば1秒もかからない距離だ。

だが、目の前の人物はその1秒に反応して、手に持ってた刀の様な物で斬ったのである。

Wは思わずトリガーマグナムを見て壊れて無いのを確認すると、再度現れた謎の人物を見た。

特殊な作りをした鍔の刀を手に持ち、赤いブーツ、白いグローブ、下半身は黒色で金色のベルトをしている。

上半身は赤に黒いラインが袴の襟の様に入っており、一番の特徴的なのは、その顔だった。

「……火……？」

思わず呟いた翔太郎の言葉通り、赤い仮面に黒色で大きく『火』の文字が入った様な仮面をしていた。

その人物は刀の峰を肩に乗せると一言呟く。

「参る」

地を蹴りWとの距離を一気に縮めると刀を振り下ろした。

出会う事の無かった2人が出会い、新たな運命が動き出す。

第3話 Sは突然に／運命は動き出す（後書き）

第3話、どうだったでしょうか？

ちよつとだけ話が進んだ感じですかね。

なのは×W×シンケンなのに、今の所W要素ばかりなのは少しヤバい気がします^^；

後、題名考えるのはかなり難しいですね、アルファベットとかが……
今後、被る可能性もあると思いますが御了承下さい><

さて、次回はまた視点が変わります。

お待たせしました、あの方の登場ですw
では、また次回。

第4話 Sは突然に／侍の始まり（前書き）

お待たせしました、第4話です^^；

今回は頑張って長く書いてみましたが、殆どがシンケンジャーの説明文になった気がします……ゴメンナサイ

という訳で、今回は前回の話を少しさかのぼった所から始めます。

そして、お待ちかねのあの方の登場ですw

詳しい話はあとがきで……それではどうぞ！

第4話 Sは突然に／侍の始まり

その世界では、人々が平和な日々を過ごしていた。

しかし、この世とあの世を繋ぐ『隙間』から三途の川より
化け物達が現れ、人々達は恐怖に怯えていた。

三途の川に住むという化け物達の名は『外道衆』

奴らは人の不幸による涙を流させる事により、三途の川を
溢れさせ人の世を支配しようと企む。

た。

だが、その企みから300年間人々を護り続けた者達が居

る。

この物語は陰ながらこの世を護った六色の侍達の物語であ

第4話 Sは突然に／侍の始まり

・志葉家屋敷 丈瑠の部屋

嘗て300年前から人の世を恐怖に陥れて来た集団『外道衆』。

奴らは三途の川を溢れさせ人の世を支配しようと企んでいた。

しかし、その外道衆から人の世を護る為に選ばれた者達が現れる。

その者達こそ、俗に言う侍達 シンケンジャーである。

彼らは300年間、代々に力を受け継ぎ外道衆と戦ってきたが、

御大将『血祭ドウコク』の力は非常に強く倒す事は出来ず、代々のシンケンジャーでは封印するのがやっとであった。

そのシンケンジャーも18代目となり、再び外道衆との戦い火蓋は切って落とされる。

5人であったシンケンジャーも6人へと増え、先代達の力も加わり、全て者達の想いが1つになり、ようやく血祭ドウコクを封印ではなく倒す事に成功した。

そして、外道衆との戦いが終わり、侍達は元の生活へと戻っている……

『水』のモチカラを受け継いだシンケンブルーこと『池波流ノ介』は、戦いで一度は捨てた歌舞伎の世界へと戻って行った。

『天』のモチカラを受け継いだシンケンピンクこと『白石茉莉』は、長年すれ違ってきた両親との絆を戻すべくハワイで一緒に過ごしている。

『木』のモチカラを受け継いだシンケングリーンこと『谷千明』は、浪人生として大学受験に向けて勉強中。

『土』のモチカラを受け継いだシンケンイエローこと『花織』ことは、故郷の山奥で姉と暮らしている。

『光』の電子モチカラを用いるシンケンゴールドこと『梅盛源太』は、自らの寿司の腕を上げる為へとフランスへ修行へ旅立った。そして、『火』のモチカラを受け継いだ志葉家十九代目当主シンケンレッドこと『志葉丈瑠』は……史上最大の敵に立ち向かうとしている。

「……………」

丈瑠は1人部屋にて胡坐を掻いて目を瞑り精神を統一している。静かな空間で彼は目を見開くと、その手に『シヨドウフォン』を握った。

シヨドウフォンには使い方と形態が2つあり、1つ目は通信等を行う『携帯モード』、そして、2つ目がモチカラを発揮する『筆モード』である。

筆モードでモチカラを使い、様々な事が出来、変身も筆モードを使う。

丈瑠がシヨドウフォンを横に折って筆モードにすると、徐に宙に文字を書き始めた。

シュツシュツと筆の音が鳴り響く中、文字が完成し反転させる。

『防音』

何故かその2文字を障子の方に向けて投げると、文字は障子に吸いこまれて消えた。

これで障子にはモチカラにより、『防音』の効果を得た訳である。その行為を部屋の四方の壁や障子、天井にも施すとシヨドウフォンを懐に戻し、先程まで真剣に見ていた物に手を掛けた。

軽々と持ちあげたソレを前に見た記憶を頼りに構える。

外見からすれば、かなり様になっているが問題は次の行動だった。これまた記憶を頼りに恐る恐る右手で弦を弾く。

びいゝん！

「痛ッ！　ゝゝゝッ」

確かに音は鳴ったのだが、自分の記憶の音とは遥かに違う情けない音だった。

更に弾いた右手の爪が思ったよりも痛く、右手をぶんぶんと振っている。

もうお気付きだろうか？丈瑠がやっていたのは『ギターの練習』であつた。

血祭ドウコクを倒して外道衆も勢力が弱まり、この世に現れなくなり約1カ月。

其々元の生活に戻って行き、丈瑠も以前と同じく志葉家十九代目当主として偶に現れるナナシ連中を倒す役目に就いたのである。

しかし、血祭ドウコクの脅威が去った今、家臣であるジイこと『日下部彦馬』から言われた一言が事の発端だった。

《これから殿に『侍』以外の生活も体験して頂こうと思ひまして、まずはカルチャー教室などいかがかと》

外道衆での一戦の間に色々とあり、これからは色々と広い世界を来て貰いたいという彦馬の願いだつたが、丈瑠は頑なに拒否した。

本人曰く「いつ外道衆が現れるか分からない」という建前を立てられては仕方がないと一旦は手を引いた彦馬。

だが、この問題はそこで終わりではなかった。

後日、何処から聞きつけたのか本家　というより丈瑠の義母である第十八代目当主の『志葉薫』から丈瑠宛てに包が届いたのだ。何事かと包を開いてみれば、中に入っていたのは新品のエレキギター！。

同封していた手紙に『丈瑠が侍以外の生活を見つけたと聞き、母としても賛成だ』という内容が書かれていた。

薫も丈瑠が今まで自分の『影』として過ごした事で侍以外の生き方を知らないというのは心苦しく思っている。

出来る事なら他の生き方もさせてやりたいと思ってた所に、彦馬からの提案を耳にして送った次第であつた。

まさか義母にまで手を回していたとは思わなかった丈瑠は、そのギターを見た時は茫然としたが、すぐに彦馬の策略と気付きしかめっ面で睨む事しか出来なかった。

彦馬だけでは兎も角、年下の義母である薫まで自分の生き方を心配されては身も蓋も無い。

半端強引だったが、丈瑠はとりあえず趣味を見つけるという意味でギターを始めたのだが……

「駄目だ。まったくわからん」

思ふような音が出ずにお手上げ状態だった。

前に彦馬が弾いているのを少し見た時は、もっと音は響いて『ギユイユイイン』と鳴ってた筈なのだが、それが出来ない。

こういう場合、先駆者である彦馬に教え請うのが普通であるが、最初に彦馬が「ジイがご教授致しましょう」と言ってくれたのに対し、つい反射的に「こんなの俺1人で出来る」と返してしまつたのだ。

変な所で変なプライドが働き、現在は隠れて猛特訓中なのだが、難航している様子である。

「おかしい……ジイは確かにこうやってたんだが」

変なプライドの所為で、ジイから渡された初心者本も突き返し悪戦苦闘しているが原因が分からない。

原因と言つても、普通の人なら『アンプに繋いでない事』と『ピックアップを使つてない事』だと気付く筈だ。

しかし、今まで関わった事も無ければ気にした事なかったので、アンプやピックアップの存在を知らないのだった。

ちなみにちゃんと包の中にピックアップは入っていたりする……が、そんなのに気付く様子も無い。

丈瑠は何度試してもジャカジャカと鳴るだけで指が痛くなる一方だった。

「……………仕方ない」

これ以上は考えても平行線になるばかりだと悟った丈瑠は彦馬に助けを求める事にした。

一度は断った手前、頭を下げるのは侍として恥だと思うが、このままギターを弾けないのも負けた気がするのだ。

流石に『ギターを辞める』という選択肢が無い所は筋金入りの頑固者の丈瑠らしい。

そうと決めたら彦馬に教えて貰おうと防音加工されたままの障子を開け部屋を出る。

今の時間なら自室だろうとギターを手にしたまま歩き出す……が、ふと足を止めた。

「　　ッ　　何だ？」

部屋を出ると同時に異様な気配に勘付いた丈瑠は気配の元を探す。庭先から感じる気配に目を向けると、そこには鳥の様な物体が鳴き声を上げて飛んでいる。

最初は外道衆の類かと思つたが、現在でもモヂカラによって護られてる屋敷に侵入は出来ない筈。

それに見た感じだと『外道衆』というよりは自分達が使う『折神』

に近い感じがする。

だが、丈瑠の記憶にはその様な折神は無かったし、歴代の記録にも残って無かった。

「一体、何だ？」

警戒する中、その飛行物体はスーッと自然な流れで丈瑠の上まで来ると旋回し始める。

丈瑠の攻撃範囲内まで接近して来た飛行物体に対し更に警戒を強めた。

（斬り落とすか……しかし、邪な感じはしない……何故だ）

敵意を見せない謎の飛行物体をどうするか一瞬だけ隙が生まれた。その僅かな隙を狙ったかの様に飛行物体から緑色の光が放たれ丈瑠の全身を包み込む。

「な　　ッ」

一瞬にして丈瑠の身体は消え、飛行物体の中へと取り込まれる。そのまま飛行物体は何事も無かったかの様に飛び去り、出現した光のオーロラの中へと消えて行った。

誰もいなくなった縁側に静寂に包み込まれる。

そこへ昼飯へと呼びに来た黒子が丈瑠の部屋の障子が開いたままなのに気付き、部屋を覗いてみると丈瑠の姿が無かった。

屋敷の何処かに居るだろうと思い、他の黒子や終いには彦馬にも知らせ探してみるが見つからない。

数時間後、各地に居る侍達や本家に一報が入る。

志葉家十九代目当主、志葉丈瑠様とその他一名の消息が不明。
現在、鋭意搜索なう。

ちなみに一報が書かれてたのは『志葉家公式つ　ったー』であった。

……………どうやら外道衆との決着後、色々と変わった様である。

-???

「　　ッ！？　……此処は？」

取り込まれた時、反射的に瞑ってた目を開くと、そこは見知らぬ林の中だった。

やはり外道衆の仕業かと警戒していると、上空から先程聞いた鳴き声が聞こえる。

そちらの方に目を向けると、何やら光のオーロラに消えていくのが見えた。

「今のは……まさか……」

ふと脳裏に1つの仮説が過ったが、確証を得てないので取り消す。とりあえずは周囲の探索から始めようとした時、突然背後から声が聞こえた。

「あれ……もしかして……タケちゃん？」

丈瑠の事を『タケちゃん』と呼ぶのは知る限りでは唯一人。振り返りながら丈瑠はその人物の名前を呼んだ。

「源太か……」

丈瑠の目の前にいるのは、いつも通りの寿司屋の格好をして屋台引いている『梅盛源太』の姿があった。

内心では知り合いに会えた事に安堵を覚えるが顔には出さずに源太に問い掛ける。

「お前、確かパリに行くとか言ってなかったか？」

「おう！　　で、此処がその『パリ』って事だ！」

ドーンと手を広げながら宣言する源太の言葉に丈瑠は一瞬頭を痛めた。

まさか、海外に連れて来られるとは思っても無かったのだ。

だが、現在位置が分かっただけでも有り難く、早速迎えの手続きをしようと思った所に意外な所から待ったの手が入った。

『ちょ、ちょ！ 親分！ 此处はパリじゃねーですぜ！』

屋台の方 提灯から聞こえる声、源太の相棒の『ダイゴヨウ』であつた。

提灯型のサポートメカ（？）であり、丈瑠達の大事な仲間の一人でもある。

「どういう事だ？」

ダイゴヨウの言葉の意味がよく分からない丈瑠は再度問い掛ける。今度は答えたのはダイゴヨウだった。

『へ、へい！ 実は本当ならアッシら、あの別れの日パリに旅立つつもりだったんでしたが……』

いざ空港とやらに行ったら、何やら『パスポート』とか『ビザ』とか必要だと言われまして。

それで、色々と手続きを終えまして、いざ出発しようと思った空港の入口を通ったら……此处に居たんでさあ』

実際の所、空港の入口で待ち伏せされていた飛行物体に、入口に入るタイミングで丈瑠と同じ様に連れ去られた事は、この場の誰も知らない。

ただ、丈瑠だけは今の話を聞いて同じパターンな事から、同一犯

の犯行の可能性を視野に入れていた。

「しかし、源太は今……此処はパリだと言ってたが？」

「だって、空港通ったんだから、此処はパリに決まってるって！」

自信満々に言う源太に、再度頭が痛くなる丈瑠。

それ以前に、その姿な上に屋台引いて空港に入ろうとして源太の行動にも驚きであった。

「兎に角、今は此処が何処か調べるぞ」

『そうツスね』

スタスタと源太の横を通り過ぎて行く丈瑠に源太が慌てて屋台を引きながら付いて行く。

「ところでタケちゃんはどうしてパリにいるんだ？ ギターなんか持って」

未だに此処がパリと言う源太に相変わらずだと呆れつつも、ギターを持ったままに漸く気付いた丈瑠。

流石に義母から贈られた物を捨てる訳にはいけないので、背中で背負う感じに持ち直した。

源太には「ちょっとな」とだけ呟いて言葉を濁す。

それ以上は源太も聞いてこなかった……と言うより

（また、ジイちゃんとかあったんだなあ）

割と変な所だけは鋭い奴である。

ギターの件はさておき、丈瑠も自分に起こった不思議現象を知る限り源太に教えた。

と言うより、言葉にして思い出し状況を整理したかったのだ。

丈瑠が事の顛末を簡単に説明すると、源太は自分が気になった要点を口にした。

「タケちゃん、今の説明にあった『光のオーロラ』ってもしかして……」

「いや、俺はお前から話を聞いただけで、実際に見た事がないから同じ物とは断言できない。

だが、あいつらが何らかの関係があるなら、そのうち顔を出すだろう」

どうやら2人は飛行物体が消えて行った『光のオーロラ』が気になつてゐる模様。

しかし、確証が無いという理由で保留扱いとなつた。

状況整理が終わつた所で、再び人を探して歩き出そうとしたが、直ぐに立ち止まる。

2人して表情が更に警戒を強めた険しい顔付きになりつつも、冷静に丈瑠はギターを屋台に置き、源太は屋台を固定すると離れた。

「気をつけろ、源太。こいつらの気配、ナナシやアヤカシの物じゃない」

「ああ。しかも、いきなり気配が現れやがつた！」

『お2人共、気を付けてくだせえ！』

背中合わせに身構える2人が気配を探ると囲まれてるのが分かった。

しかも、結構な数だが、囲んだまま姿を現さないのが不気味に感じる。

（源太の言う通り、この気配の連中は突然現れた。

だが、『スキマ』を使った気配は感じなかった……何者だ？）

『スキマ』とは文字通り隙間の事であり、外道衆はそこを使って三途の川から現れるのだ。

しかし、いつもの様にスキマを使ったのなら丈瑠達も少なからず気付く筈である。

囲んでいる者達を警戒していると、その者達が木の陰から、その姿を顕わにした。

「何だありゃ!？」

「……………」

オーバーリアクションで驚く源太は兎も角、丈瑠は驚いた様子は無かった。

源太は気配には気付いてたいたが、丈瑠には囲んでいる相手に『生氣』を感じなかったのだ。

だが、出てきた相手が機械仕掛けのカプセル型の『ロボット』だったのは丈瑠の予想出来なかった。

現れたカプセル型のロボットは黄色いセンサーを光らせ丈瑠達を視察しながらケーブルをウニョウニョと動かしつつ、ゆっくりと距離を縮めてくる。

「ウニョウニョさせやがって」 お前らはタコかってんだ!」

『いや、親分。　もしかしたら、イカかもしれませんぜ』

「どっちでもいい。　行くぞ、シヨドウフォン！」

寿司屋コンビの漫才をスルーしつつ懐からシヨドウフォンを取りだすと、開いて横に折り筆モードにし身構える丈瑠。

「おう！　スシチェンジャー！」

スルーされた事に少し涙目になりかけた源太も懐から白い携帯電話　『スシチェンジャー』と刀の鍔の様なディスク　『寿司ディスク』を取りだす。

？イラッシャイ！？

源太も開いたスシチェンジャーの変身機動ボタンを押すと機械音声の流れ変身待機音が流れ始める。

そのままスシチェンジャーを閉じ、寿司ディスクも曲線部を折り畳んで身構えた。

「一筆奏上！」

丈瑠が掛け声を上げると自分の目の前にシヨドウフォンで大きく『火』の文字を書いて反転させた。

同時にシヨドウフォンの変身機動ボタンを押すと変身音が流れ、書かれた『火』の文字が丈瑠の全身を包み込む。

上は赤色を主張としたスーツに襟を想わせる黒色のラインに胸には志葉家の家紋、手は白色のグローブ、下は黒色に赤色のブーツ、腰には金色のベルトに刀をモチーフにした武器　『シンケンマ

ル」を運び、最後に顔に『火』の文字が張り付き仮面となった。

「一貫献上！」

丈瑠の後ろで源太も掛け声を上げながら寿司を握る動作でスシチエンジャーに寿司デイスクを合体させる。

そのままスシチエンジャーを前に付きだすと、先端から光が放たれ大きく『光』の文字が現れると源太の身体を包み込む。

スーツのデザインはほぼ丈瑠と同じで、違うのは配色だけだった。源太のは金色を主張とし、襟のラインと二の腕に下は青色、腰には銀色のベルトの後ろの方に秋刀魚の様な鞘付きの小太刀『サカナマル』を運び、最後に丈瑠同様に顔に『光』の文字が張り付き仮面となった。

「シンケンレッド！ 志葉丈瑠！」

自分の名を名乗りながら勢いよくシンケンマルを振り抜き、峰の方を肩に乗せた。

源太もサカナマルを手にして抜刀し、名乗りを挙げる。

「同じくゴールド！ 梅盛源太！」

名乗りつつ一回転の要領でサカナマルを振ると、再び一回転しながらサカナマルを納刀した。

そして、源太だけが跪き、丈瑠が肩に乗せていたシンケンマルを再び横に構え峰を手で撫でながら口上を続ける。

「天下御免の侍戦隊！」

跪いていた源太も抜刀しながら立ち上がり、丈瑠も頭上高くシン

ケンマルを振りあげる。

「シンケンジャー！ 参る！！」

2人して思いっきり振り下ろしながら叫び、口上が終わると同時に其々のポーズを決めた。

その一連の動きを黙って見ていたロボット達が一斉に2人目掛けて襲いかかる。

互いに背を向けあつた状態の2人も其々前の方へ駆け出す。

襲いかかるケーブルを身体を回転させ紙一重で避けたシンケンレツド。

「ハッ！」

そのまま円運動の要領で襲いかかったロボットを斜めに真つ二つに斬り裂いた。

余りにも鋭く速い斬撃に爆発する余裕も無く唯のガラクタと化する。一方のシンケンゴルドは迫り来るケーブルを避ける様子は無かった。

「へっ！ 捌くのは得意だぜ！」

サカナマルを納刀しながら避けずにロボットの大軍にそのまま突っ込み走り抜ける。

いつの間にか抜刀していたサカナマルを再び納刀すると同時に走り抜けたロボット達がバラバラに崩れ落ちた。

何が起こったのか分からなかったのか、他のロボット達の動きが一瞬止まる。

「あ、わりいわりい！ 速すぎて見えなかったな、今度はもう少し

ゆっくりやってやるよ！」

そう言いながら腰を落としサカナマルを構えるシンケンゴールド。挑発を受けたのかサイドに広がってたロボット達がシンケンゴールド目掛けてケーブルで攻撃する。

先程と同じく迫り来るケーブルに避ける行動を見せずにいると、手が一瞬ぶれて消えた。

同時に襲いかかったケーブルが輪切りにされていく。

シンケンゴールドの剣術の基本は逆手による『居合』といい、鞘から抜き放つ速さを利用し相手に攻撃する。

その速さは普通の剣術の中でも最も速く、我流ながら居合を使いこなす源太の技は剣術に長けている丈瑠も認めた程だ。

派手なシンケンゴールドの戦いとは逆にシンケンレッドの戦い方は動きに無駄が無く、自然に流れる感じで次々と一刀両断していく。

「タケちゃん、こいつら大した事ないぜ」

「油断するな、来るぞ！」

「へ？」

相手の数が減り、丁度隣に来たシンケンレッド相手に余裕の台詞を述べるシンケンゴールド。

それに対し、シンケンレッドは一言だけ忠告するとシンケンゴールドの肩を押して倒すと自らもその場を離れる。

一瞬呆けたシンケンゴールドだったが、直後に自分達が立ってた場所に謎の光線が着弾するのが見えた。

今の攻撃は　　と見るとロボット達の黄色いセンサーが怪しく光ったと思ったらレーザーを放ってきたのだ。

「そんなのアリかよ！」

どうやら接近戦だと勝ち目が無いと思ったのか遠距離戦に持つていくつもりの様だ。

その行動はある意味正しく、2人共『標準装備』には飛び道具は装備されてない。

かと言って、遠距離戦が効果があるとは断言出来ない。
何故なら

「所詮は真っ直ぐにしか飛んで来ない。 一気に突っ込むぞ」

シンケンマルの峰を肩に乗せたまま地を蹴り駆け出すシンケンレッド。

迫り来るシンケンレッド目掛けてレーザーの集中砲火が襲うが、全てケーブル同様に避けて行く。

流石にケーブル攻撃よりかは速い攻撃なので、避けられないのも出てくるが、シンケンマルを振りビームを斬り裂く。

例え相手が遠距離攻撃に切り替えても、冷静に判断する精神力と長い戦いで培ってきた経験や技があれば刀1つで切り抜けられる
それが『侍』なのだ。

「流石、タケちゃん！ 俺も負けてられないな！」

斬撃の速さだけならシンケンレッドよりも上だが、冷静な判断力が無いのは自分でも理解している。

だから同じ真似は出来ない……ならば、斬撃を更に速くすればいいだけの話だと、ベルトのバックルから寿司ディスクを取りだす。

「サカナマル！」

寿司ディスクをサカナマルの鰐としてセットすると地を蹴り空高く跳び上がる。

ロボット達もすかさず上に向けてビームを放つ。

「百枚おろしいいいいい！！」

先程までとは比べ物にならない位の速い斬撃で迫るビームを拡散させつつ、ロボット達のと真ん中に着地する。

そのままの勢いで周囲のロボットを巻き込む様に剣を振るうと、再び跳んで次の団体の所へと着地すると全てをバラバラに斬り崩した。

シンケンゴールドの戦い方は一見無茶に見えるが、自分の腕に自信があるからこそ、成せる技なのだ。

僅か数分も掛からずに粗方をスクラップにし、残るはシンケンゴールドが戦ってる球体型のロボットだけとなった。

そっちの方はシンケンゴールドに任し、他に敵が居ないか気配を探るシンケンレッドだった……が

「ッ！？」

突然に茂みから黄色いビーム……と言っても先程のロボット達が撃つたのは別な物が数発飛んできた。

自分を囲むように曲がり迫ってくるエネルギー弾に避けるのは得策ではないと即座に判断したシンケンレッドは身体を一回転の要領であらゆる方位から迫ってきたエネルギー弾を全て斬り落とす。

そして、追撃が来る前に仕留めようと茂みへと突っ込んだ。

相手が追尾弾を使ってた事から、こっちを仕留めたと想いあがってる所を叩くのがシンケンレッドの策だった。

茂みを一気に付きぬけると、そこに居たのは1人の人影　と
迫り来る一発のエネルギー弾。

「ハッ！」

ザンッ！

殆ど反射的に身体が動きエネルギー弾を斬り落としていた。

『え………』

「な………に………」

聞こえて来る驚きに近い声にシンケンレッドはゆっくりと顔を上げる。

既に奇襲は失敗に終わり、自分の行動もバレていたと思ったシンケンレッドは相手を視察する事にした。

右半分が全て黄色で左半分が全て青色、赤いW型のバツクルのベルトをし、顔は赤い複眼にV字の触覚、右手には先程攻撃したと思われる銃が握っている。

（こいつは一体何者だ？　アヤカシ　にも見えなくても………
ん？あれは）

シンケンレッドが気付いたのは謎の二色男の近くで倒れている少年の姿。

おそらく襲われたんだろうと想い、この場で戦うのは危険と判断

する。

「……火……？」

「（まずは注意を逸らす！）参る」

二色男が何か呟いたのは聞こえずに、地を蹴り一気に距離を詰めるシンケンレッド。

構えたシンケンマルを二色男目掛けて振り下ろした。

魔法少女の世界でぶつかる侍と探偵。

2人の決着は如何に！？

魔法少女達の出番は？

第4話 Sは突然に/侍の始まり（後書き）

第4話、いかがだったでしょうか？

戦闘シーンは苦手なので読みづらかったら御免なさい>>

あと、途中で小ネタとかも挟んでますが、基本的にネタは挟んで行くと思います、御了承下さい。

そういう訳で、この物語ではシンケン組からは丈瑠と源太のみが参戦という形になってます。

同じくW側も探偵コンビのみとなっています。

理由としては、StSの世界を舞台にすると、あまりにも登場人物が多くなりすぎるのかな？と思ったからです。

本当はシンケン組も全員出したかったんですが、そこらへんの事情でカットとなりました。

しかし、何故に源太が出てきたかと言えば、ただ単におバカキャラが欲しかったのと、他にも大事な理由があるんですW（今は内緒ですが、鋭い方は気づいたかもW）

Wの方もアクセルは登場しないと思います。

残された人達は自分達の世界を頑張って護ってると思って下さいW

さて、次回はWvsシンケンレッドの初対決。

ディケイドとはやりそなってるので、頑張って書きたいと思います。

それではまた次回。

第5話 Sは突然に／探偵vs侍 誤解から生まれる闘い（前書き）

遅くなって申し訳ありませんでした><

色々と書いてたら少し長くなってしまいました……

相変わらずの戦闘シーンが下手で申し訳ないです><

後半のなのは側には自己解釈の要点が何ヶ所があるので、ご了承ください。

出来れば感想とか欲しいです……

それではどうぞ！

第5話 Sは突然に／探偵VS侍 誤解から生まれる闘い

突如、見知らぬ場所に飛ばされた4人の戦士達。

だが、その出会いは複雑化していた。

侍は突然襲い掛かってきた探偵に刃を向け、

探偵は突然襲い掛かってきた侍に牙を向けた。

少しの誤解から人は争いを起こす……それは正義を守る戦士とて同じである。

第5話 Sは突然に／探偵vs侍 誤解から生まれる闘い

- ??? ?

エクストリームメモリによって見知らぬ地へ連れてこられた翔太郎とフィリップ。

林の中を彷徨つてると現れたのは謎のロボット軍団だった。

翔太郎の不調なものにも関わらず呆気なく殲滅したのも束の間、また新たな敵が現れる。

その人物は『火』の文字の仮面をした侍 シンケンレッド
と志葉丈瑠。

同じ宿命によって導かれた戦士だと知らず、思わず攻撃してしま
うW。

人里離れた林の中で今、世紀の闘いの火蓋が切って落とされた。
先制したのはシンケンレッド、Wの懐に入り込むとシンケンマル
を振り下ろす。

一方のWも反射的にトリガーマグナムを使って両手で受け止めた。
ぶつかり合っているシンケンマルとトリガーマグナムの間に火花
が散る。

両者共に引かずに押し合っている所からするとパワーはほぼ互角
……いや、若干Wが不利だと気付いたのはフィリップだった。
万全の状態なら互角なのだろうが、今の翔太郎は毒の影響が残っ
ている。

更にそんな状態でのマキシマムドライブ使用直後なので体力はギ
リギリと言った所だろう。

このままでは不味いと自分サイドの足 右足で蹴りを放つ。
翔太郎さえも不意を付かれた一撃、入れば相手を崩し優勢に立
て
る……筈だったが、

「ハッ！」

入る直前でシンケンレッドが後ろに跳び攻撃は空振りで終わった。
着地しながら再度シンケンマルを構え直す。

同じくWもトリガーマグナムを持ち直しながら冷や汗を掻いてい
た。

< 悪いなフィリップ。正直、今のは助かった >

< いや……それにしても、今の攻撃を避けられたのは僕の想定外だった >

< 確かに。アイツ、かなり強いぜ >

今の不意打ち攻撃は並大抵の腕では躲しきれない、つまりは相当の手練という事が分かる。

対するシンケンレッドも今の攻撃は冷や汗ものだった。

(今の攻撃、奴の動作に変化が見られなかった)

普通は攻撃する時は意識してないつもりでも、自然と意識してる事が多い。

武術を極めると、その少しの変化を読みとる洞察力によって『先読み』する事が出来る。

シンケンレッドも幼い頃からの鍛練の積み重ねで多少ながら先読み出来た。

だが、今の不意打ち攻撃には僅かな意識変化も無く、正に無意識に攻撃したと言える。

(『無我の境地』……確か前に聞いた事がある。

無意識の内に身体が反応して動く為に、無駄な動き無しに行動出来る。

奴がそれを身に付けてるのか……もしくは唯の紛れだったのか

どちらにしろ只者ではない事は確かか……)

まさか1つの身体に2つの意識があるなんて予想は出来なかった。ちなみに『無我の境地』を知ったのは、千明がことはと漫画の話

をしてた時に偶々耳にし、興味本位で聞いてみたら、千明は漫画の話だとバレない一心で適当に言い訳を並べ立てたのだ。

説明としては一応筋が通ってたし、まさか漫画の話だと分からなかった丈瑠はそのまま信じたのだった。

（あの後、流ノ介が『トリプルカウンター』とか言ってたが何だったんだろうか）

ふと思い出してしまったが、今はそんな事を考えてる場合ではないと考えを切り替える。

今度は不意打ちも警戒しつつ再度Wの方へ駆け出す。

<翔太郎、接近されると厄介だ>

<分かってる。さっきは落とされたが今度は一発じゃないぜ>

先程のルナトリガーの弾を斬り落としたのは一発だったからと高を括った翔太郎はトリガーマグナムを構えると乱射した。

乱射された無数のエネルギー弾は宙を浮遊かの様に動くとシンケンレッド目掛けて襲いかかる。

接近戦に持ち込まれる前に遠距離戦で決着付けようと弾幕で時間稼ぎしてる間にトリガーメモリに手を掛けた時だった。

「ハッ！ ハアアアアッ！」

事も有るうちにシンケンレッドは襲い掛かる弾を順に斬り落としていったのだ。

数が2、3発なら可能だろうが、彼は次々と時間差で襲い掛かるエネルギー弾を綺麗に捌き切っている。

と言っても、やってる方からすると結構辛い状況なのだが

……

(このままでは面倒だ)

シンケンマルを左手のみで振るしつつ右手でシヨドウフォンを取りだすシンケンレッド。

そのまま筆モードにすると素早く宙に『反』の文字を書くとき反転させる。

すると、『反』の文字がシンケンレッドを包み込むバリアの様になると一斉に襲い掛かってきたエネルギー弾を全て弾いた。

「なっ!?!」

＜問題無い、弾はまだ生きている。速くマキシマムドライブで一気に決めよう＞

バリアを張って弾いた事にはWも驚くが、ルナトリガーのエネルギー弾は全て誘導弾、例え弾いてもエネルギー弾が残ってれば再度攻撃される筈と高を括る。

だったのだが、弾かれたエネルギー弾は宙で反転するとシンケンレッドではなく、Wの方へと飛んで来た。

「嘘だろ!?!」

チュドドドドドドドドドドドオオオオオ!

まさか弾かれるだけでなく返されると予想してなかったWは避ける事も出来ずに全弾喰らってしまった。

着弾時に巻き起こった爆煙が巻き起こり、シンケンレッドからはWの姿は見えない。

かと言って無暗に飛びこむのは危険だと煙が晴れるのを身構えつつ待つと

? LUNA METAL?

辺りに響くガイアウイスパーと共に晴れた爆煙の中から現れたのは、右膝を跪き左半身を前にしてガードする体制のWだった。

その身体には多少のダメージはあったものの、着弾した弾数にしては少なすぎる。

更に先程は左半身が青色だったのに対して、今は銀色に変化もしていた。

実は着弾寸前で抜きとってトリガーメモリの代わりに『メタルメモリ』をボディサイドのスロットに指し込み、『ルナメタル』にフォームチェンジしたのだ。

『闘士の記憶』を宿したメタルメモリは、主に防御力と破壊力に優れてる為、咄嗟に防御力の高いルナメタルにフォームチェンジしたという訳である。

<翔太郎、今のはナイス判断だったね>

<ああ、だが流石に全弾受け止めたのはキツかった>

躊躇無く回避を捨てた翔太郎の起点で大ダメージだけは逃れたW。一方のシンケンレッドは冷静にWを分析する。

(色が変わった……状況に応じて変化するタイプか。

さっきのは射撃型といったところか、今度のは……)

Wを見ると左半身の背中部分に棍棒の様な武器『メタルシヤフト』が付いているのが見える。

それで戦う接近戦タイプだなと見切ったシンケンレッドは再度攻撃を仕掛ける為に地を蹴った。

メタルシャフトの長さを頭の中で計算してギリギリ当たる距離まで詰め、相手が大きく振り回してきた隙を狙う。

シンケンレッドの思惑通り、迫り来る自分に対してWがメタルシャフトを引き抜くと、そのままシンケンレッド目掛けて大きく振り回してきた。

空振りさせる為に一旦射程外に出ようとバックステップしようとした時だった。突然にメタルシャフトの先端が伸びたのだ。

「何!?!」

予想外の攻撃にバックステップで回避しようとしたが、そこまで大きく避けるつもりでも無かった為に未だメタルシャフトの攻撃がシンケンレッドを捉えた。

バシイイイイン!

「クッ!!」

強烈な鞭打ちの音と共にシンケンレッドの胸部を撓ったメタルシャフトが火花を散らして直撃した。

今の重い一撃に怯んだシンケンレッドへ、メタルシャフトを撓らせて再度追撃するW。

流石に相手の武器が『鞭の様な物』と分かったのでシンケンマルで斬り返そうとするが、弾くのが精いっぱいだった。

(力の方では奴の方が一枚上手か……なら……)

相手とのパワーの差を埋めるべく、シンケンレッドはベルトのバ

ツクル部分へと手をやる。

バックルが開き、収納されていた赤い秘伝ディスク 『獅子

ディスク』を取りだすとシンケンマルの鰐としてセットした。

そして、セットした獅子ディスクを思いっきり手で回す。

「ハッ！」

周囲獅子ディスクが鰐の部分にあるプラキシノスコープに、ディスクに描かれた獅子が走る様子が映る。

獅子ディスクから燃え上がる炎がシンケンマルの刀身を纏っている。

燃え盛る炎の熱が離れてるWにも大きな威圧として感じる。

『翔太郎！』

「わかってる！ デカイのが来るぜ」

『あの炎から察するに、今の翔太郎の状態とルナメタルではパワーが足りない』

「炎には……炎で対抗だ！」

立ち上がりながらWドライバーを閉じ、スロットからルナメモリを引き抜き、新しく赤色のメモリを取り出す。

？ HEAT？

『熱き記憶』を宿したガイアメモリ 『ヒートメモリ』を起動させるとWドライバーへと差込んで開いた。

? H E A T M E T A L ?

ガイアウイスパーと共に黄色だった右半身が赤色へと変わっていき。

メタルメモリの高い防御力と破壊力に、ヒートメモリの熱の属性が付加する事によりパワーが更に上がる。

パワー系同士の組み合わせなので、その一撃は非常に強く並大抵の装甲も打ち砕く程の破壊力。

それが接近戦では最も攻撃力の高いフォーム 『ヒートメタル』である。

またもや姿が変わったWにシンケンレッドも警戒を強める中、Wはダブルドライバーからメタルメモリを引き抜き、メタルシャフトのスロットへと差し込んだ。

? M E T A L M A X I M U M D R I V E ?

響くガイアウイスパーと共に、メタルシャフトの両端から物凄い炎が噴出し、それを構えるW。

お互いから発せられる異常な熱気がぶつかり合い、辺りが緊張が走る。

両者共に警戒しているのか、睨み合いが続いている中、茂みが動いた。

「タケちゃん、こっちは片付いた……ぜ……？」

残りのロボット達を片付けたシンケンゴールドが何も知らず茂みから現れたのを合図に両者地を蹴った。

何が起こつてなのか理解できないシンケンゴールドを他所に、互いの必殺技を仕掛ける。

「シンケンマル！ 火炎之舞！！」

「『メタルブランディング！！』」

それぞれの必殺技を叫びながら、炎で纏った自らの武器を振るう。互いの武器がぶつかり合った瞬間、大爆発を起こした。

ドゴオオオオオン！！

「くっ！」

「『うわあああああ！！！！』」

巻き起こる爆発にそれぞれ吹き飛ばされ地面に倒れるWとシンケンレッド。

直撃は受けてないとはいえ、流石にダメージが大きく両者ともに変身が解けてしまった。

すかさずシンケンゴールドが起き上がりつつとしている丈瑠へと駆け寄る。

「タケちゃん！ 大丈夫か！？」

「ああ……それより……」

シンケンゴールドに肩を貸して貰いながら何とか立ち上がる丈瑠が、吹き飛ばされたまま倒れてる翔太郎を見る。

ポイズンドーパントの毒の影響にマキシマムドライブの多様につき、既に翔太郎の体力は限界だった。

そこに追い打ちをかける先程の爆発でとうとうダウンしてしまったのだ。

「なあ、コイツ誰なんだ？」

「知らん。俺が聞きたいぐらいだ」

何がどうなってるのか混乱している2人を他所に、先程まで気絶していた様に見えた少年　フィリップが起き上がった。

起き上がったフィリップは、丈瑠達に目もくれずに翔太郎へと駆け寄る。

「翔太郎？　翔太郎！」

フィリップが翔太郎の頬等をペチペチと叩いて意識を確かめるが、起きる気配は無かった。

まだ謎の襲撃者達は残ってるのに、翔太郎がこれではWに変身出来ない。

如何にか打開策を出せないか考えようとした時、不意に金色仮面の男の台詞が耳に入ってきた。

「ああ、もう！　いきなりロボットには襲われるわ！　半分この妖かと思ったら人間だったわ！　どうなってんだ一体！？」

どうやら丈瑠から大体の事情を簡単に聞いたシンケンゴールドが頭がかけえて叫ぶ。

相変わらずのオーバーリアクションに丈瑠も溜息を吐く。

兎に角、目の前の男を拘束して少年を保護……出来るなら情報が聞き出せないかと思った時、少年の方から話しかけてきた。

「ロボットに襲われた？　君達もかい？」

「お、おう」

ズカズカと聞いてくるフィリップに流石のシンケンゴールドも押され気味に返事を返す。

何か情報を得られないかと、今度は丈瑠が口を開いた。

「その様子だと……お前達が仕掛けてきたんじゃないみたいだな」

「ああ、僕達も突然に変なロボット達に襲われたんだ。

そこに突然に君が現れたから、つい攻撃してしまったんだ。すまない」

「いや、いい。こっちにも非はある」

普通に会話している丈瑠とフィリップを他所に、シンケンゴールドは変身を解いて屋台を回収して来た。

「なんだかよく分からないけど、とりあえずここから移動しようぜ。また変なのが出てくるかもしれないし」

源太にしてはまともな事を言うなと内心で源太の成長に驚きつつ、源太の提案に賛同する丈瑠。

フィリップも頷くとロボットの1体を指差して、源太に指示を出す。

「そのロボットを1体回収してくれないか？ 何か情報を掴めるかもしれない」

「おう！ って、何で俺がお前の言う事聞かなきゃならねえんだよ！」

江戸っ子の性なのか、ついノリで返事してしまった源太が反発する。

やっぱ何時もの源太かと前言撤回しつつ、丈瑠が回収するロボットに近づく。

「源太、いいから回収するぞ。今は俺達も情報が欲しい所だからな」

「……タケちゃんが言うなら、仕方ない」

流石に丈瑠の言うことは素直に受け止め、2人でロボット1体分を屋台に何とか乗せる。

一方のフィリップは気絶している翔太郎が起きないので、仕方なく背負う事にした。

しかし、体格が大きい翔太郎を背負うのは困難で、四苦八苦している……

「手伝おう」

フィリップの隣まで駆け寄った丈瑠が背負っている翔太郎に肩を貸す感じで支えた。

これにはフィリップも助かると素直に反対側の肩を貸し歩き出す。もう丈瑠の中では、この2人は敵ではないと先程の一撃で確信している。

自分と打ち合った必殺技には邪な気は無く、真っ直ぐ純粋な気を感じた。

（だが、こいつらが味方かどうかは話を聞くしかない。

それに、この現象がこいつらの仕業ではないとすると……何者の

仕業で目的は一体何だ……？)

歩きながらも今置かれた現状を再度考える丈瑠。

単純に考えるなら、外道衆が仕掛けた罠だと思うが、それなら源太と同じ場所に飛ばすより分散した方が効率がいい。

それに仕掛けてきたのは全て無機物のロボット、外道衆が使うにはハイテク過ぎる気がする。

兎に角、回収したロボットと2人の話から何か手掛かりが掴めな
いか期待しつつ一向は現場を後にした。

そのわずか数分後、入れ違いに機動六課のスターズ分隊が現地に
到着し、驚愕を受けるのだった。

- 機動六課 ミーティングルーム

突如現れたガジェット軍団の騒ぎは僅か30分も満たずに沈黙し
た。

その要因の中には機動六課の迅速な行動も含まれるが、大きな原因は敵の撤退である。

機動六課が最初のポイント Wとシンケンジャーが戦ってた跡に到着したのを皮切りに徐々に撤退を始めたのだ。

その為に一般人への被害は少なかったが、陸士部隊の被害はそこそこ出た程度だった。

と言つても、死者はいなかったが。

さて、無事に帰還を果たした隊長陣とFWメンバー達、とり損ねた昼食をそこそこに先程のガジェット襲撃の報告会を開いていた。

参加者は隊長陣にロングアーチからシャーリー、そしてスクリーンには機動六課を裏から支援している聖王教会の騎士『カリム・グラシア』と同じく機動六課の後見人の1人である本局の提督である『クロノ・ハラウン』が映し出されている。

大体の状況の説明が終わると早速クロノの口が開いた。

『なるほど、大体の状況は把握した。』

それで、はやてはその数分足らずでガジェットを破壊された事が引つかかつてる訳か』

「せや。発見から出勤までに多少時間かかったとは言え、ガジェットが10分も満たない内に約50体も全滅しとる。

そないな事が出来るのは、ウチの隊長陣並の実力の持ち主という事や。

最初は聖王教会か、もしくはクロノ君が派遣してくれたのかと思つたけど……」

『残念ながら、教会の方も人員不足でそこまで手が回らないの。』

『ごめんなさい』

『こつちも同じだ。しかし、そんな事が出来る奴なら限られて来

と思うが……とりあえず、こつちでも調べておこう」

「じゃ、詳しい現場検証の報告を。 シャーリーお願い」

「分かりました」

はやての指名で立ち上がったシャーリーがパネル操作しながら説明していく。

メインスクリーンにガジェットの残骸風景が映し出された。

「残ってたガジェットの残骸から、細かい内訳は？型が46体、？型が3体。

その内、？型3体と？型22体がモノアイを打ち抜かれ、残り24体がバラバラに切断されてます。

次にこちらをご覧ください」

ガジェット達の残骸のスクリーンが小さく縮小表示になると、今度は現場の一部がメインスクリーン映し出された。

そこには地面に爆発の痕跡と焦げた跡が残っている。

勿論、Wとシンケンレッドの必殺技がぶつかり合った跡だった。

「現地の調査員の見解だと、痕跡から見て普通の爆発というより、何か大きな力同士が衝突した跡に近いという報告がありました」

シャーリーの報告に、執務官として操作能力に長けているフェイトも賛同の声を上げる。

「私も同じ見解です。 周囲の跡から見て、恐らく炎熱系の魔力変換資質の魔導師同士の衝突があったと思います」

「せやな。私もフエイトちゃんと同じ意見や。」

となると、現場にいた人物は少なくとも2人以上という訳になるな。

しかも、その2人は敵同士の可能性が多い訳や」

わずかな爆発跡から、情報が出てきた事に若干安堵する反面、更に謎が増えた事に少し気落ちする。

しかし、此处でめげる訳にはいかないと、謎の存在を特定する為に他に意見を募った。

「なのはちゃんから見て、どう思う？」

「うーん……私も現場を詳しくは見てないんだけど、この打ち抜かれたガジェット……」

寸分の狂いも無くモノアイだけ打ち抜いてる事から、砲撃型魔導師というよりは射撃型魔導師だと思う。

けど、この弾痕から見ると炎熱系の焦げた跡が無い事から、撃つたのは第三者の可能性もあるかも」

もしくは炎熱系の魔導師が属性無しの魔法弾で撃つたとしても、AMFが常備されてるガジェット相手にやるメリットが無い。

むしろ、炎熱能力を付加する事で攻撃力はあがるし、AMFがあったとしてもダメージが期待出来る。

その事から、なのははこの仮説は挙げなかったのだった。

「なるほど、これで現場には少なくとも3人以上居たという事やね。シグナムはさっきからスクリーン見てるけど、なんか分かったんか？」

「あつ、いや、これは！」

会議の間にも関わらず何かスクリーンを真剣に見てたシグナムに声を掛けるはやて。

突然に声がかかったので、慌てながらも返答した。

「いつものシグナムらしくないで？ 何か分かった事あれば何でも言つてや。今は少しでも情報が欲しいねん」

主の心遣いに内心で感謝しつつ、落ち着きを取り戻したシグナムが自分の意見を述べた。

「有益な情報になるかどうか分かりませんが、このガジェットの断面からして恐らく日本刀系の武器が使用されたと思います」

「なんやて？」

はやての驚きの声で一同の視線が何故かなのはに集まる。

どうして『日本刀』でなのはを連想するかと言うと、細かく言えば『なのは』ではなく、その『家族』を指していた。

なのはの家には父の『高町士郎』と母の『高町桃子』、兄の『高町（現性：月村）恭也』、姉の『高町美由希』がいるのだが、士郎と恭也に美由希の3人は御神流という剣術の使い手なのだ。

それを知ったバトルマニアのシグナムは一時期、士郎や恭也に勝負を挑んでた頃があり、その時に見せてもらった『漸鉄』の跡が今回のガジェットの断面に似ていたのだった。

「私やテストロツサも鉄を『切る』事は出来ませんが、ここまで鋭利には切れません。」

ですが、日本刀の様な武器を使えば、相当の腕の持ち主なら『斬る』事が出来ると以前に高町士郎氏に教えられました」

「私もシグナムと同意見です。そして、もう1つ気づいたんだけど、この斬られてる側のガジェットも大きく2分出来る。

一方は一刀両断で真つ二つなんだけど、もう一方は1体に対して何回も斬ってる感じがある。

しかも、斬り方からしてほぼ一瞬で何回も斬ったという感じ。速さは私以上かもしれない。

わざわざ違う斬り方をするとは思えないから、こっちも2人以上居た可能性は高いかも」

フェイトの言う通り、一度斬ったにの対して、態々地面に落ちた部品まで斬る必要は無い。

となれば、宙に浮いている間に一瞬で何回も斬ったというのがフェイトの意見だった。

「これだけで大体見えて来たな。

射撃系魔導師が1人以上、日本刀型のアームデバイス持ちの前衛魔導師が2人以上。

内、どれか2人は炎熱系の魔力変換資質持ちか、他にも居たのか……結構見えてくるもんやね」

『かなりの大所帯なら、手がかりは掴み易いな』

今までの情報ははやてとクロノが整理していた時だった。

緊急通信が入ったシャーリーが急いで報告の声を挙げる。

「八神部隊長！ 現地の調査員から緊急通信です」

「緊急？ どないしたんや!？」

緊急という単語に一同に緊張が走る。

「それが……現場から残留魔力の反応が出なかったそうなんです……」

『 ツ！？ 』

シャーリーの読み上げに今度は衝撃が走った。

『残留魔力』とは文字通り残留している魔力の事であり、大きな魔導師の戦闘があつた跡には暫く残っている物である。

管理局の捜査では、そういった残留魔力の反応から、使用した魔法や魔導師を特定したり、飛行魔法で逃げた経路を特定したりして活用してるのだ。

ただ、この残留魔力にも欠点があり、残留すると言っても残ってるのは僅かな時間に限られるという事。

そして、AMFの範囲内だと、その短い時間が更になり早い時間で分解される事。

他にも弱すぎる魔法は特定し難いとか、色々と難点があるが大きな物証になるのは確実なので、捜査や裁判ではよく使われたりしている。

大きな爆発跡が残る程の魔導師戦があつた直後にも関わらずに残留魔力が残ってない という事は、その答えをはやてが口にした。

「使用されたのは……質量兵器の可能性が出てきたちゅう事が……」

かつてミッドチルダで起こった戦争で使われた『質量兵器』。

誰もが使え、多くの犠牲を引き起こした結果、時空管理局は質量兵器を禁止する法を造った。

代わりに、肉体的ダメージは無く魔法ダメージを与えて攻撃する

という『魔法』が使われる事になる。

大きな怪我や死亡者を出さないという事でクリーンと謳われた魔法は時空管理局を始め多く浸透していた。

その為に魔法が使えない者と使える者と格差社会になってしまったのだが、これはまた別の話だ。

話を戻すと、それ故に質量兵器を所持していると、それだけで大罪であり、使われたとなると大事件として扱われる。

『はやて……もし、これが質量兵器絡みとなれば厄介な事になるぞ』
「せやな、時期が悪すぎるわ」

クロノの言葉にはやても苦い顔をする。

実は此処最近になって、ガジェットの活動が活発になり大量発生の頻度が多くなった。

その為に、連日に近いぐらいガジェット絡みで出撃している。

更にそれとは別にレリック関連の捜査や日頃の訓練も熟している為に隊員達に少しずつだが疲労の影が見え始めていた。

それは機動六課だけの問題でもなく、他の部隊でも同じ状況で、そのまま行ったら大惨事間違いない。

そこで地上本部総司令である『レジラス・ゲイス中将』は地上に質量兵器の配備しようと動いてる噂が出てきた。

実質、前線で戦える魔導師にも限りがあるが、質量兵器は少し訓練すれば誰でも前線に出れる。

現状を打開するには打って付けなのだが、魔法主義の管理局が許すはずも無い。

しかし、今回の事が質量兵器による物だとしたら、質量兵器の実績を盾に地上に質量兵器を配備する事となる。

（それだけは絶対にあかん。 何としても阻止せえへんと……

しかし、これだけの力……何とか取り込めないもんか……)

そう思う反面、現在の六課の隊員達の疲労具合を見ると、大きな力は欲しくなる。

言ってる事に矛盾していると気付かずにはやてが考えてると……

ヴィー！ヴィー！ヴィー！

『 ツ！？』

再び六課内に鳴り響く警報と『A L E R T』のウィンドウが開いていく。

何事かとパネル操作したシャーリーから再び大量のガジェット反応が出たという報告が出た。

「陸士部隊は先程の襲撃の余波が残ってて出られそうにも無いみたいなんです」

「何やて！？ …… しゃあない！ なのはちゃん達隊長陣はすぐにFWメンバーと共に現地に飛んで。

シャーリー、悪いけどヴァイス君に出動準備の要請と再び飛行許可の申請頼むわ！」

本来なら休ませたい気持ちがあるのだが、先程の襲撃に大したダメージも出てなかった為に出動を許可する。

「……………了解！」「……………」

慌てて立ち上がると、隊長陣4人は一斉にドアから走り出していた。

そして、シャーリーも関係各所に連絡を回すべく司令室へと向かう。

残ったのははやてとクロノとカリムが映ったスクリーンのみになった。

「ところでカリム、『予言』の方はどないな感じなん？」

はやての言葉にカリムは首を横に振る。

『予言には今回の出来事は書かれていませんでした。新たに予言するにしても、まだ時期じゃないので無理だと思います』

『予言』とはカリム・グラシアの所有する希少能力
プロフエーティン・シュリフテン
キルの『預言者の著書』にて記された物の事だ。 レアス

記された予言は全て古代ベルカ語によるもので、困難な解読が必要であり、解釈次第では違った内容になったりする。

しかし、そこに書かれてる事は、これから起きる可能性のある世界的に大きな事件等がランダムに記されているのだ。

本人は解釈ミスを含め『割とよく当たる占い』と言ってるが、高確率で的中する事から時空管理局からの信用も高い。

そして、この機動六課設立にも大きく関わるのだが、それはまた別の話である。

『予言の再解釈を含め、出来る限りの事はしてみましょっ』

『こつちも新たな情報が無いか洗いなおしてみるさ』

「2人とも……ほんまありがとう！」

両者共に余裕なんて無い筈なのに、氣遣ってくれる事に素直に感謝し頭を下げるはやて。

その様子を微笑ましく見ていたカリムが口を開く。

『騎士はやて、頭を上げて下さい。今、貴女がやらなければならぬ事は頭を下げる事では無い筈です』

人を導く態度に口調は、流石は教会の人間だなと聞いていたクロノは思う。

言葉を受けたはやても、すぐに頭を上げて今すぐにやらない事現場指揮の為に立ち上がる。

「せやな！ あたしは司令室に上がるわ。 2人とも、もしもの時は限定解除の件頼むで」

スクリーンの2人が頷くのを確認すると、再度頭を下げてミーティングルームから駆け出して行った。

その様子を見ていたクロノが呆れ口調で呟く。

『やれやれ……相変わらずの百面相だな』

『ふふ、そこがはやての可愛い所ですよ』

物語は大きく動き出した。

異世界に飛ばれた探偵と侍の運命は？

次々と起きる出来事に魔法少女達の未来は？

全世界を浸透させる大事件の幕開けだった。

第5話 Sは突然に/探偵vs侍 誤解から生まれる闘い（後書き）

シンケンジャーvsWの戦いどうだったでしょうか？

多少のハンデはありつつも、この場合は殿の勝ちになるんですかね？w

さて、これで第一章が終了した感じですね。

この章のサブタイトルの『Sは突然に』のSは『STORY（物語）』のSでした。

このイニシャルとか決めるのが凄く難しいですね、考えるの大変でした><

さて、次回はとうとう魔法少女組との邂逅……の前に、シンケンW組での情報交換が入ります。

それでも次話では出会うんですけどねw

それではまた次回もよろしく願いします。

ご意見・ご感想・質問等も受け付けてますので、よろしく願います。

第6話 ようこそMへ／不思議な少女達（前書き）

本当にお待たせして申し訳ありませんでした！

言い訳にかなりませんが、リアルの事情や、色々考える事もあったりして半年以上かかった難産でした。

待っていたいたがいましたら、本当に申し訳ありませんでした！><

さて、今回からは新章という事でサブタイも少し変わりました。

前回は『異世界訪問編』だとしたら、今回は『魔法少女邂逅編』みたいな感じになると思います。

そして、半年かけて悩んだ結果、少し設定を弄りました。

設定前は【ミュージアムとの決戦前】でしたが、設定後では【W最終回後】という事にしました。

勝手な変更申し訳ありません。

それでは第6話、どうぞ！

第6話 ようこそMへ／不思議な少女達

第6話 ようこそMへ／不思議な少女達

「……」

「ん……んんっ……」

翔太郎が目を開けると、そこは見渡す限り一面真っ暗な空間だった。

まるで宇宙空間を漂ってる気分の翔太郎が自らの身に起きた事を思い出す。

（俺は……あの赤い仮面野郎にやられて……そうだ！ フィリップは！？）

シンケンレッドとの戦いで気絶した事まで思い出すと、慌てて周囲を確認する。

しかし、見渡す限り真っ暗で何も見えない……そんな時に、どこからか声がした。

「いく……、……は、翔……」

ハッと声がした瞬間、翔太郎の視界が急に変わった。

突然の事に理解がついていけない翔太郎だが、再度周囲を見渡す。縦横無尽に飛び交う光に響き渡る爆音、巻き起こる爆煙、まるで戦場かと思える場所に立っていた。

? E …… R ?

? …… P E …… D ?

? D r …… I …… t …… n …… o …… y u ?

何か途切れ途切れに聞こえたと振り返ると、そこには後光が差し
ている3人の人影があった。

しかし、後姿な上に後光の所為で良く見えない。

それでも特徴だけは微かに分かる。

1人は盾と剣のような物を構え

1人は剣のみを携え、羽織のような物を着ており

そして、最後の1人は

3つの人影は各々の掲げる武器を構えて何かへと駆け出していく。
その先に何かがあるのか見ようとした時だった

「……た　　！　　しょ……う！　　翔た　　！　　翔太郎！」

最初は囁く程度の小声から、段々と大きくなり、ついに聞き取れる音量になった途端、翔太郎の視界が再びホワイトアウトした。

「ッ!？」

バチツと目を開けた翔太郎が身体を起こすと、傍らには心配している顔の相棒の姿があった。

「翔太郎!! やつと起きたね……」

必死に呼び続けた結果、ようやく目を覚ました翔太郎に安堵の溜息を吐くフィリップ。

フィリップの様子から先程まで見ていたのが夢だと認識するが、妙にリアル感があった。

しかし、思い出そうとすると何故か上手く思い出せない。

またいつもの妄想が働いたのかと、気楽に切り捨てると再び現状を知る為に周囲を見渡す。

先程まで居た森の中と違って変わって、今度は薄暗い洞窟の中の様だった。

自分の意識が無かった間に何が起こったのかフィリップに質問する。

「一体、何があったんだ? 此処は何処なんだよ、フィリップ?」

「その後、僕達は敵の増援が来る前に移動したんだ。

街の方に行こうと思ったけど、あのロボットの残骸を持ちながら街中をうろつくのは目立ちすぎる。

だから、近くを探索して見つけた洞窟に隠れた……それが今の状況さ」

フィリップの説明で大体の状況を把握できた翔太郎の視界に2人の人物が入った。

その視線に気付いた2人は翔太郎の方に顔を向ける。

1人は少し目付きが鋭いが中々の美形な男、もう1人は提灯みた
いなのを持った寿司屋の格好をしている男性だった。

なんか場違いの寿司屋に呆れていると、フィリップが話を進める。

「翔太郎が起きた事だし、まずはお互いの自己紹介から始めよう」

気絶している間にしてなかったのかというツッコミを必死に飲み
込んで翔太郎が自分の自己紹介を始める。

「俺は左翔太郎、探偵だ。こっちは相棒のフィリップ。よろし
くな」

「……志葉丈瑠だ」

翔太郎の自己紹介に無愛想に名前だけ答える丈瑠。

その横で頭を掻きながら無駄に笑いつつ源太がフォローを入れる。

「あゝわりいな。タケちゃんはやっと人見知りするんだ。
決して怒ってるとかそういうのじゃないから、許してくれ！」

「は、はあ……」

源太のフォローに丈瑠が渋い顔で睨んでるが、当の本人は気にせ
ずに話を進める。

急に中腰になり、右手を前に出す感じの構えになると声を上げた。

「おひけえなすって！ 自分は性は梅盛、名は源太、字はゴールド
！ ケチな寿司屋にして侍でそうろう！」

「はあ！？」

「なるほど、これが侍の名乗りか。初めて見たよ、興味深い」

相変わらずの源太のノリに丈瑠は呆れの溜息を吐く。

対して翔太郎は色々混ぜた自己紹介に「なんじゃそりゃ」と言いたげな顔になり、フィリップは意外にも真面目に受けとめていた。

流石に『地球の本棚』にアクセス出来る彼も常識はかなりズレている様だ。

そんな相棒の反応に翔太郎は「んなわけあるか！」とツッコミを入れると何処からか声がする。

『おひけえなすって！ オイラはダイゴヨウってんでい！』

突然聞こえた声の主を探そうと翔太郎とフィリップが周囲をキョロキョロと見るが丈瑠と源太しか見えない。

すると、源太が自慢げに屋台下に下げている提灯を外すと改めて2人に紹介する。

「俺の分身……いや、相棒のダイゴヨウだ！」

『よろしくな御兩人！』

「ちょ、ちょ、提灯が喋ってる!？」

あまりの出来事に、ワナワナと提灯を指差して驚く翔太郎。

良く見ると提灯の上の方に頭みたいなのがカチャカチャと動いている。

「凄い！ 自我を持ってるだけでなく言語能力を持つてるとはガジ

エツト以上だ！

非常に興味深い……ゾクゾクするよ。見せて貰ってもいいかい？」

「あ、ああ……」

『ちょ、親分！？』

興味深々に目を輝かせて迫るフィリップの迫力に負けた源太は素直にダイゴヨウを手渡してしまった。

渡されてしまったダイゴヨウは首をカチャカチャ動かし抵抗の意思を見せるが、フィリップはお構いなしにダイゴヨウを弄る。

秘伝ディスクの発射口とか触られた時には『くすぐりたい』と抗議するが、「感覚まであるのかい！？　ますます興味深い」と火に油を注ぐ事となった。

こうなったら収まらない事を重々知っている翔太郎は話だけでも進める事にする。

「で、こんなの持つてるって事はあんた等只者じゃないな。何者だ？」

「それはだな「それは俺が説明する」……タケちゃん、少しは俺にも話させてくれよ」

源太の言葉の途中で割って入った丈瑠に非難の声を上げるが、「お前だとややこしくなる」と切捨てられる。

丈瑠は自分達の事、外道衆の事、最終決戦の事等を話していくが、細かくまではあえて話さなかった。

ただ概要的に『自分達は外道衆と戦ってる侍戦隊シンケンジャーで外道衆の大将を倒した』程度である。

何故に全て細かく話さなかったかと言うと、丈瑠としてはまだ翔太郎とフィリップを100%信用した訳じゃないからだ。もしも、2人が敵だった場合、自分達の戦力を知られてるのは丈瑠としても好ましく無い。

なので、最低限の情報だけで様子を見る事にしたのだ。

「なるほどな、んじゃ今度はこっちだな」

丈瑠の説明が終わると、今度は翔太郎がソフト帽を被り直し語ります。

内容的には『自分達は風都で探偵をやっており、その正体は怪人と戦う仮面ライダーWである』的な感じである。

こっちもあえて『ガイアメモリ』や『ドーパント』については話さなかった。

理由としては丈瑠程に深い意味も無かったが、ガイアメモリについては話すと長くなりそうなので省略した感じである。

「てなのが、俺達の街の事なんだが……おい、聞いてたか？」

「あ、ああ……」

翔太郎が自分達の事を説明し終わると、何か考えてる様子の丈瑠と源太。

2人は今の翔太郎の説明の中で、『何か引つかかる単語』が出てきたのだが、それが何かまで分からずに考え込んでしまったのだ。とりあえずそれぞれの説明をダイゴヨウを弄りながら聞いてたフィリップがまとめる。

「僕達の居た所では、そんな大きな戦いは無かった……逆に君達も風都の事は知らない。」

これは普通に考えて、僕達は互いに別の世界の住人と考えた方が合理的だ」

「別の世界……なるほどな、それなら納得がいくぜ」

フィリップの考えに翔太郎も直ぐに納得してしまった。

いつもの翔太郎なら「そんな事あるか！」と常識人のツツコミを入れる所だが、既に彼らは『異世界』に関わる事件に2回も巻き込まれてる。

そして、それは翔太郎達だけでなく、丈瑠達にも同様の事だった。

「……ディケイド……」

「…… ツ！？」「」

フィリップの言葉を聞いて、丈瑠は漸く引つかかった物が分かり呟いた。

その呟きに源太は「あのイカちゃん泥棒か！」と声を上げ、翔太郎とフィリップは意外な所から出てきた単語に驚く。

「お前、ディケイドを知ってるのか？」

「……と言う事は、お前たちもか？」

「ああ、まあな」

翔太郎達と『ディケイド』は二度共闘した事がある。

一度目はディケイドのピンチを救った時、二度目はダミードーパントを追跡中に世界を渡った時だった。

その両方共に異世界での出来事だったので、現在居る場所が異世

界と納得した訳である。

「お前の話に出てきた『仮面ライダー』から俺達の共通点は『ディケイド』か……」

改めて確認する様に考える丈瑠達も異世界に関わる事件には二度遭遇している。

一度目は翔太郎達同様にディケイドと共に外道ライダーと戦った時、二度目は12体の炎神と7色の戦士達と共に戦った時であった。しかも後者の時に丈瑠は話しか聞いてないが、源太は異世界に飛んでいる経験がある。

その為に自分達が異世界に居るといふ仮説もすんなり受け止められたのだった。

「鳥型の機械……おそらく志葉丈瑠が言ってるのはエクストリームメモリの事で間違いない」

「つまり、俺達は同じ方法で此処まで連れられて来られたのか」

其々の世界について把握した後に、現状までの経緯の情報交換をすると新たに1つの結論をフィリップが導き、その結論に丈瑠が付け加える様に呟く。

それまで黙ってた源太が首を傾げながら口を開いた。

「んじゃ、そのえくすとリーむめもり？だっけか？ それを呼べば俺達帰れるんじゃないのか？」

「確かに梅盛源太の言う通りだ。しかし、それは一度試しているが現れる気配は無かった」

源太の案は既に言われる前に試しているがフアング同様に呼びかけに応じる気配は無かったのだ。

試しにスタッグフォンでリボルキャリーを遠隔操作しようとしたが、これも応答する気配がなかった事を追記しておく。

大体の情報を交換し終えた所で、今後の行動について丈瑠が切り出した。

「今後の行動だが ツ!？」

しかし、言葉を言い切る前に何かの気配に感付いた丈瑠が洞窟の入り口の方を振り向く。

少し遅れて源太も気配に気づいたのか、入り口の方を警戒する構えを取った。

外道衆との戦いで気配に対して鋭くなった2人だからこそ感じる事が出来た訳で、インドア派なフィリップは兎も角、まだまだハーフボイルドな翔太郎は何も気付かない。

それ故に2人の行動に何かあったのかと尋ねる翔太郎。

「さっきのロボットと同じ気配だ、こっちに向かって来ている」

翔太郎の問いに簡潔に答える丈瑠はショドウホンを取り出し入り口の方へ歩き出す。

その後ろに源太もスシチェンジャーを取り出しながらついて行くこととするが、翔太郎は如何するか迷ってた。

理由は変身時のフィリップの身体の件である。

先程は緊急事態だったので、戦場にも関わらず変身したが今回も

態々戦場になる場所に連れて行って放置する訳にはいかなかった。

いつもならフィリップの身体を安全な場所まで運んでくれる亜樹子が居るのだが、そんな存在がいる筈も無い。

だからと言って、洞窟に残すのも気が引ける訳である。

どうするか迷っている翔太郎から事情を聞いた丈瑠達の会話に割り込む言葉があった。

『だったら、オイラがフィリップの旦那の身体をお守りしやすぜ！』

フヨフヨと浮いているダイゴヨウが立候補したのだ。

ダイゴヨウ自身もある程度は単体で戦える事を説明した源太の言葉を信じ、ダイゴヨウに相棒を任せる事にした。

「頼むぜ。出来る限りは洞窟から離れた場所に誘導すつからよ」

『合点承知！！』

ダイゴヨウの返事を聞くと、ダブルドライバーを腰に装着し、丈瑠達と共に走りだす翔太郎。

残されたフィリップはいつでも変身できる様に緑色のメモリサイクロンメモリを取り出す。

? CYCLONE ?

洞窟内に響くガイアウイスパーと共にダブルドライバーへとサイクロンメモリを差し込むフィリップ。

意識を失い屋台へと寄りかかる感じで気絶したフィリップを守るべく周囲を警戒する様に飛ぶダイゴヨウであった。

- 洞窟の外 森

洞窟から出た3人が目にしたのは入り口付近を囲む様に陣取るロボット達の姿であった。

数はほぼ先程と同じぐらいなのを確認すると其々の変身アイテムを構える。

「一筆奏上!!」

「一貫献上!!」

「変身!!」

? CYCLONE JOKER ?

三者三様の掛け声と共に其々の戦士の姿へと変わっていく。
腰に差していたシンケンマルを抜いたシンケンレッドが2人に指
示を出す。

「中に入られると厄介だ。 場所を変えるぞ」

「「おう!!」」

シンケンレッドに指示に答えた2人は敵を引き付けるべく、あえて全員で左側へと走り出す。

3人の動きに反応した中央と右側のロボット達が左側に終結する様に動き出した。

作戦通りだとシンケンマルでロボット達を切り捨てていくシンケンレッドは更に洞窟から離れていく様に動く。

サカナマルでバラバラに切り裂きながらシンケンゴールドもその後を追う。

武器の無いWはサイクロンジョーカーの特徴である素早い徒手空拳でロボット達を殴り飛ばしている。

「敵の数がやっぱ多いな……やっぱ、ここはトリガーで……」

流石にサイクロンジョーカーで団体相手は厳しいと判断した翔太郎がトリガーメモリを取り出す。

しかし、その行動はフィリップによって止められた。

「いや、まだ翔太郎の身体は万全じゃない状態でのトリガーメモリは危険だ、やめた方がいい。

まだ、この後に何かがあるかも分からない内に全力で行くのは得策ではない」

「それもそうだな」

『それとマキシマムジライブの使用も厳禁だ。今日は既に連続で3回も使用している』

「分かってるって!」

フィリップの意見を尊重しサイクロンジョーカーのまま様子見る事に決めたWは近くロボットを殴り飛ばす。

シンケンジャーの2人に比べて武器がない分、少し厳しいかと思われたが、サイクロンのスピードで十分に付いていけるし、ジョーカーのパワーだけで装甲を貫ける。

戦力として申し分の無い3人が戦闘を始めて僅か3分も経たずに大量にいた敵のロボットが両手で数えられる程に減っていた。

「へっへーん！ やっぱ俺達の敵じゃないって事だな！」

「源太、翔太郎、油断するな。来るぞ！」

「へ？」

「は？」

簡単に壊されていくロボット達を前にシンケンゴールドが余裕の声を上げていると、シンケンレッドは叱咤しつつ誰も居ない場所にシンケンマルを向ける。

どういう意味だと思ってシンケンレッドが構えた方向を見るシンケンゴールドとW。

すると、何も無い所に紫色の円状の光が地面に光ったと思った次の瞬間、光の中からロボット達が次々と現れた。

「うひゃー！ なんじゃこりゃー！ー！」

「おいおい……マジかよー！」

『何も無い所からの出現……実に興味深い』

オーバーリアクションするシンケンゴールドに、うんざり声を上げる翔太郎。

フィリップに至っては出現方法に興味深々な状態である。

「お前達、呆けてる場合か」

三者三様のリアクションに呆れ気味の声を上げつつ1人でロボット軍団に斬り込むシンケンレッド。

遅れてWとシンケンゴールドも迎撃行動に入るが、倒しても倒しても次々と紫色の光が光ったと思ったら増援がやって来る。

流石に1体1体は雑魚でも多すぎると体力的にもキツくなってくる。

既に激戦の連続だったWが一番最初に限界に来たのか、拳の威力が次第に落ち始めていた。

「翔太郎、大丈夫かい？」

「大丈夫！ と言いたいが、正直キツいな」

軽く弱音を吐くWは死角から襲い掛かるロボットに気付かなかった。

突っ込んで来たロボットにWが気付いた時は反応が遅れて完全に隙を付かれた かと思った次の瞬間、シンケンマルが飛んできて襲い掛かるロボットの黄色いセンサーを貫く。

投げたシンケンレッドが周囲の敵を徒手空拳で倒すと素早くシンケンマル回収に駆け寄りシンケンマルを引き抜いた。

「油断するな。 敵はまだいるぞ」

「ああ、分かってる」

お互いに背中を預ける感じで構えるシンケンレッドとW。
一向に増援が止まない敵に対し対策は無いかと考えた時だった

「タケちゃん！　上なんか来てる！！」

「何？」

シンケンゴールドの声に反応したシンケンレッドとWが軽く上を見上げると大きめのヘリが浮遊するのが見えた。

『見た事ないタイプのヘリだ。　形からして輸送機といった所だろうね』

「輸送機？　敵の増援という事か？」

Wの右目の複眼が点滅しながら語るフィリップの声に対し、同じWから聞こえる翔太郎が質問で返す。

傍から見れば奇妙な光景にも動じずシンケンレッドはシンケンマールを構えながら言い放つ。

「敵の増援なら態々ヘリなど使わんが、警戒だけは怠るなよ」

「分かってるって！」

シンケンレッドの注意に返事したWが襲ってくるケーブルを掴み投げ飛ばす。

宙に投げ飛ばされたロボットが地面に叩き付けられた時、更に状況が変わる事態を告げたのはフィリップだった。

『翔太郎！　へりからこっちに何かが飛んでくる！』

「何い！？」

フィリップの言葉にシンケンレッドとシンケンゴールドも同じ方向を見上げた。

3人……いや、4人の視界にはへりから飛び降りてくる人影が6つ確認できる。

明らかに現在戦ってるロボット達とは別だが味方と判断する材料も無い。

どう判断すればいいのかと思った時、降りてきた人影の1人真っ白の服に桃色の杖？を持った女性が口を開いた。

「待って下さい。　私達は敵ではありません」

それが運命に導かれた戦士達と魔法少女との邂逅であった

- 数分前　JF - 704式内部

出撃命令が下されてから直ぐに飛び立ったJF - 704式の内部

にはFW陣となのは、フェイトの姿があった。

副隊長のヴィータとシグナムは別のガジェットが出現する可能性を想定して六課で待機している。

現場に向かうJF-704式の中で、なのはが今回のミッションの詳細を確認していた。

「今回ガジェットが出現したのは、先程戦闘があったエリアから僅か数百m離れた森林の中です。

木々が多い場所なので4人での連携は難しいから、其々のペアで動くのがベストだと思うの。

私とフェイト隊長もなるべくフォローに回るから訓練通りに行こうね」

「……はい！」「……」

なのはの指示にFW陣は揃って返事を返す。

その後、現状に合わせた動き方を確認しているとヘリパイのヴァイスから緊急報告が入る。

「なのはさん、そろそろ現着なんですけど……現場に戦闘反応を確認しました！」

「……ッ！？」「……」

ヴァイスの報告に明らかな反応を示すなのはとフェイト。

先程の会議での話題だった謎の人物達が交戦した場所から離れて無い所からすると、ヴァイスの報告の人物達は該当する可能性は高い。

隊長2人の反応にFWの4人も何事かと気付き始める。

暫くするとヘリのカメラから撮られた映像がスクリーンに映し出

された。

そこにはガジェットと戦う3人の姿がある。

「何者なんですか……この人達……？」

3人の戦い方を見てたティアナが思わず口にした。

それもその筈、ガジェットには対魔導師用のAMFが備わっており、例えランクが高くても倒すには少し苦労する。

だがスクリーンの人物達は意図も簡単にガジェットを殴り飛ばしたり、真つ二つにしているのだ、魔導師側からすればとんでもない事なのだ。

戦ってる3人に対して如何いう対応をすべきか考えてた時、六課の方から連絡が入った。

『なのはちゃん、フェイトちゃん。聞こえる？』

「うん、聞こえるよ。はやてちゃん」

「はやても見てるんだよね。この映像」

『せや。今、指令室で中継見とる、ヴィータとシグナムも待機しつつ見てくれとるわ』

「この人達は如何対応した方がいいかな？ やっぱり保護する方向でいい？」

なのはが現在戦ってる人物達の対処法を聞くと、少し考えた様子のはやてが決断を下す。

『なのはちゃんの言う通り保護優先でええよ。』

しかし、相手は何者か分からないから此方の印象を悪くしない様にな。

もし相手が敵対行為を行った場合は仕方ないけど捕縛する方向でお願いな』

「……了解！」

はやての言葉に少し違和感を感じつつも通信を切るなのは。

そんな様子のなのはにフェイトが声を掛けるが「うっん、なんでもないよ」といつも通りの返事が返って来た。

自分の考え過ぎかと気持ちを切り替えたフェイトが降下ポイントの指示をFW陣に出す。

その横でなのはは先程の違和感が何だったのか考えつつもスクリーンの3人の戦いを見ていた。

「なのはさん、フェイトさん。現場に到着したのでハッチ開きます」

ヴァイスの言葉と同時にヘリのハッチが少しずつ開いていく。開ききった所でののはが降下の指示を出した。

「まずはスターズから！」

「はい！ スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「「行きます!!!」」

名乗りを上げた直後、スバルとティアナはハッチから飛び降り空

中でバリアジャケットを装着していく。

上手く降下したのを確認すると、次はライティングの2人に指示を出す。

「次はライティング！」

「エリオ、キャロ……しっかりね！」

「はい！ フェイトさん！！！」

自分達の母親代わりであるフェイトの言葉に元気良く返事した2人は淵に立つ。

「ライティング3、エリオ・モンティアル！」

「ライティング4、キャロ・ル・ルシエ！」

「「行きます！！！」

続いてライティングのエリオとキャロがスターズ同様に飛び降りる。

空中で上手くバリアジャケットを装着したのを確認すると、最後になのはとフェイトも準備した。

「スターズ1、高町なのは！」

「ライティング1、フェイト・T・ハラオウン！」

「「行きます！！！」

先の2組と同じく同時に宙へと蹴り出す2人。

落下しつつお互いの相棒を取り出すと変身の掛け声を上げる

「セーット、アップ!!」

? Set up?

2人の掛け声に対してデバイス達が眩い光を発し2人の身体を包んでいく。

ほぼ一瞬の内になのはは白色をモチーフとしたバリアジャケット、フエイトは黒色をモチーフにしたバリアジャケットに白いマントの姿へと変わる。

先に降下したスバルの魔法『ウイングロード』で作り上げた光のレール上に無事に着地したFW陣。

隊長2人は外を飛ぶ事が出来る為に宙に浮いたまま、自分達の方を見ている3人に言葉を掛ける。

「待って下さい。 私達は敵ではありません」

はやてに言われた通り印象を悪くしない様に言葉を選びながらなのはが説明していく。

「私達は時空管理局本局古代遺物管理部機動六課の者です」

自分達の身分を明かすなのには対し、3人の反応は薄い。

最初に言葉を発したのは金色のスーツの男 シンケンゴール
ドだった。

「じくうかんりきよく……なんちゃらかんちゃら? 何じゃそりや
!?!」

なのは達からすれば「お前が何じゃそりやだろ！」というツツコミが口に出かけたが何とか押し込めた。

だが今のシンケンゴールドの発言で自分達の言語が通じる事に安堵したなのはが説明を続ける。

「貴方達が相手にしているガジェットは私達にとっても敵なんです。だから、私達は貴方達の敵じゃありません」

相手が同じ敵なので協力しようと言ってるなのはの言葉に沈黙が流れる。

Wは何も言わずになのはの方を見てるだけ、シンケンゴールドはガジェットを切りながら状況が分からずに混乱中。

そして、シンケンレッドは一言「好きにしろ」とだけ言うと、再びガジェットに斬りかかった。

無愛想な返事になのは少し顔を顰めたが気にせずにFW陣に指示を出し始める。

そんな中、ただ1人……Wだけが突っ立っていた。

「……………」

『翔太郎？ 翔太郎！』

「あ……ああ！ すまん、フィリップ」

翔太郎の脳裏で何か引っ掛かる物があつたのだが、何か思い出せないまま正気を取り戻した。

流石に同化しているフィリップも翔太郎の深層心理で考える事までは分らないのか注意を促す。

『どうかしたのかい？ 君らしくも無い……まさか、彼女達に見惚れてたと言わないよね？』

「ばっ、馬鹿言っな！ そんな事ある筈無いだろ！ 今は戦闘中だぞ！」

フィリップのツッコミ少し動揺しながらも襲ってくるガジェットを殴り飛ばすW。

何で彼女の姿を見て呆れていたのか自分でも分からない翔太郎にフィリップは呆れ口調で呟いた。

『やっぱり君は完成されたハーフボイルドだよ……』

「うっせ！」

『それよりも……翔太郎、気付いたかい？』

突然の話の転換に翔太郎は何の事だは分からず「え？」と返す中、別の声で返事が返って来た。

目の前でガジェットを切り裂いたシンケンレッドが振り向かずに口にする。

「お前も気付いたか」

『流石は志葉丈瑠。 君は気付いたようだね』

何の事を言ってるのか分からなかった翔太郎が聞こうとした時、少し離れていたシンケンゴールドも駆け寄ってきた。

「タケちゃん、連中の増援が止まっちゃった！」

「何！？ 本当だ……増援が現れてねえ……」

シンケンゴールドの言葉通り翔太郎が周囲を確認すると、残っているのはガシエットの残骸のみだった。

まだ離れた場所で先程の少女達が戦ってるが、増援が現れる気配がない。

「敵も在庫が尽きたって事か。どっちにしろこれ以上戦うのは正直キツイぜ」

ふーっと溜息を吐きながら身体の力を軽く抜くW。

既に3連戦している状態なのだ、流石の翔太郎でも限界が来るのは仕方の無い事だった。

一息ついたに未だに戦ってる少女達の様子を伺うと、光のレールを走りぬく少女や光の弾を撃ち出す空飛ぶ女性、仕舞いには大きな竜の姿も見える。

何か今まで見た事ない戦いを目の当たりにしたシンケンゴールドと翔太郎は普通に驚いていた。

「すっげー！ あの娘達、中々やるなあ！」

「おいおい……女の子が空飛んだり、竜が口から火吐いたりとか、まるでファンタジー小説の世界だな」

「……………」

驚く2人に対して、シンケンレッドはシンケンマルの峰を肩に起きつつ静かに戦闘を見ている。

その様子が何かいつもと違うのに気付いたシンケンゴールドが話

しかけた。

「タケちゃん？　どうかしたのか？」

「……いや、何でも無い」

「？」

シンケンレッドの素っ気無い返事に首を傾げるシンケンゴールド。
素っ気無いのはいつもと同じなんだが、違和感を感じた。

かと言って、その違和感が何かまで分かる筈も無かったの
で、今の所は置いておく事にする。

そんな事をしている間に、少女達の方も戦闘が終わり一箇所に集
まっていた。

何やら自分達の方をチラチラと気にしている様子に「当然か」と
内心で呟くWとシンケンゴールド。

残ったシンケンレッドだけは無言で様子を伺っている。

すると、少女達の方から先程の白い服の女性が此方の方にやって
来た。

「改めまして、私は時空管理局本局古代遺物管理部機動六課スター
ズ分隊隊長の高町なのは一等空尉です」

丁寧に頭を下げるなのはに一瞬呆けたシンケンゴールドは慌てて
返事を返す。

「あ。シンケンゴールド！　梅盛源太！」

「……シンケンレッド、志葉丈瑠」

いつもの登場口上と共に同じ構えで名乗りを上げるシンケンゴルドに後ろで見ていた少女から「おー」という声上がる。

黙ってたシンケンレッドも同じ名乗りだが、シンケンゴルドと違いただの自己紹介みたいな感じで終わった。

もちろん、名乗りの構えも取って無い。

最後に出遅れたWが自己紹介をしようとするが、自分には2人の様な名乗りを上げる台詞もポーズも無いので、自分の中で一番クールに見えそうな格好で自己紹介する・

「俺は仮面ライダーW。 またの名はハードボイルド探偵、左翔太郎だ。 そしくちよつと待った、翔太郎>……？」

自分の相棒の紹介もしようとした時に、その相棒からストップの声がかかった。

しかも、いつもの様に声に出さずに、わざわざ念話見たいな物を使ってた。

<翔太郎、僕の事は出来るだけ内密の方がいい>

<どういう事だ？ フィリップ>

<まだ彼女達を100%信頼出来ない。 もし、彼女達が『ミュージアム』の様な組織の人間だったらどうするんだい？

僕達はこの異世界に来て、日が浅すぎる。 慎重に行動しないと元の世界に戻るかも危ないんだ>

<……そうだったな。 分かった>

確かにフィリップの能力の『地球の本棚』は使い方次第では途轍もない兵器にもなる。

現にミュージアムは『地球の本棚』を利用し、『ガイアメモリ』という悪魔の道具を生み出したのだから……

そう考えるとフィリップの事は隠しておくのが得策だと納得した。

「どうかしたんですか？」

途中で黙ってしまったWに心配そうに声をかけるなのは。

慌てたWは「な、なんでもない！話を続けてくれ」と話を本筋に戻すように促した。

特に気にしなかったのか、なのは話を続け始める。

「えっと、今回の一連の事と貴方方の事を詳しく教えて欲しいので機動六課の隊舎まで来て頂くと有難いんですが……」

なるべく刺激しないように言葉を選びつつ同行して貰うように促す。

先程の彼らの戦いを見た感じ『負けはしない』と確信したが、なるべくなら余計な手間はかけたくない。

だが彼らが拒否の行動を取れば已む無しに捕縛するしかないと、レイジングハートを握る手に力が入る。

なのはの言葉にシンケンゴルドはシンケンレッドの顔を見て様子を伺っていた。

聞き覚えの無い組織の名前に空を飛ぶ少女達、そして見た事もない力　怪しむなというのが難しい話であるが、今は少しでも情報欲が欲しい所。

多少の危険はあるが相手の誘いに乗って見るかとシンケンレッド
丈瑠は変身を解いた。

「分かった」

一言だけ返事する丈瑠にホッと肩ほ撫で下ろすなのは。

同様にシンケンゴールドとWも一安心すると、其々変身を解除していく。

その様子に魔法少女組が少し驚くが丈瑠達は気にせずへり

JF-704式　へと歩いて行っただ。

道中、翔太郎がベルトも外そうとするがフィリップからストップの声がかかる。

<翔太郎、僕もリアルタイムで状況を知りたいから暫くはベルトをつけたままで頼む>

<おいおい、さすがにこんなベルトしていたら変な奴だと怪しまれるだろ？>

確かにダブルドライバーの形状と私服とではミスマッチもいいところである。

だがへりに向かう途中、不思議と誰もそれに指摘をして来なかった。

<これは僕の推測だけど、この世界的にこの手のファッションは常識的なんだろうと思う>

<常識的って……まさか……………？>

フィリップの指摘に自分達を連行（？）している少年少女達の服装を見てみる。

自分達に話しかけてきた『高町なのは』は兎も角、その隣を歩く金髪ロングの黒い服に白いマントの女性はガントレットみたいなものを付けていた。

他にも青い髪の少女はローラーブレードに良くわからない歯車の

付いた手甲、ピンクの髪の少女も少々メカチックな手袋している。
確かに言われてみればメカチックな物を見に付けていても怪しまれないのも納得だ。

<確かにフィリップの言う通りだな>

<相手側から指摘されるまでは自然体で過ごすんだ>

<分かってるって、ハードボイルドな俺には容易い事だぜ>

その返事に対してフィリップは「君はハーフボイルドだからすぐ顔に出る」と小言を言おうかと思ったが心の中で止めといた。

下手に翔太郎を刺激して大声上げてしまい、相手側に不信に思われると厄介だと思ったからだ。

ちなみに翔太郎のベルトに対しての指摘が無かったのは、なのは達もベルトが『デバイス』だと思ったからだっただのする。

そんな事とは知ってか知らずか翔太郎は自分達の前を先導して歩くなのは達の後姿を見つつ、ソフト帽を被り直す。

(さて、どんな事件が俺達を待ち受けてるのやら……)

<……翔太郎、勝手なモノローグはいいから先に進みなよ。 皆、君を待ってるんだよ?>

<……………はい>

交わる事の無かった『探偵』、『侍』……そして、『魔法少女』
の物語。

運命の齒車は 今、完全に回り始めた。

第6話 ようこそMへ／不思議な少女達（後書き）

第6話どうだったでしょうか？

若干長かった気もありますが、話はほとんど進んでない気がします・・

・ ^^ ;

これで一応は全員出会い、次回はいよいよ機動六課で話し合いです。
ここらは手を抜かずにちゃんと語らせたいたい・・・と思います。

それでは次回もよろしく願います！

また半年後とかは避けたい・・・orz

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1288m/>

魔法少女リリカルなのはStS ~ 仮面ライダーWvsシンケンジャー 世界分け目

2011年9月11日11時22分発行